

## 序章 計画策定の背景

### 1 計画策定の背景と目的

伊賀市は、忍者の発祥地、松尾芭蕉<sup>まつお ばしやう</sup>のふるさとといった歴史・文化に由来する全国的な知名度を有するコンテンツと魅力に恵まれた地域である。

藤堂高虎<sup>とうどうたかとら</sup>が建設した上野城下町においては、史跡上野城跡をはじめ近世以来の寺社や武家屋敷などが点在し、明治の擬洋風建築<sup>ぎやうふう</sup>、昭和のモダニズム建築といった近代・現代の建造物も多数残されている。こうした歴史的景観の重層性が評価されて、平成 29 年（2017）には、日本イコモス国内委員会により「日本の 20 世紀遺産 20 選」の一つに選ばれている。

また、四季折々の豊かな自然を見ることができる農村部においては、農業を中心としてきた生活や社会に根差した文化が色濃くのこり、里山景観とともに伝統行事や民俗文化財を多くみることができる。これらは地域社会の維持がさまざまな課題に直面している現在、人々を結び付ける役割を果たしている。

平成 16 年（2004）11 月に 1 市 3 町 2 村が合併し人口 10 万人の伊賀市が誕生して 20 年が経過した。合併当初に比べ人口減少が予想を上回る速度で進行している。かつての上野城下町である中心市街地においては、賑わいの創出が恒常的な課題となり、農村においては人口減少と超高齢社会の進行があいまって、産業・生活・文化といった地域の維持が困難な状況に陥っている。

こうした状況のもと、伊賀市の豊かな歴史的資産や景観、人々の営みを次世代に継承するとともに、地域の付加価値として磨き上げ人口減少社会に対応するため、市が策定するさまざまな施策と一体的に施策の推進を図り、より実効性の高い計画としていこうとするものである。

### 2 計画期間

本計画は、令和 8 年度（2026）から令和 17 年度（2035）を計画期間とする。

### 3 計画策定の体制

本計画は、本市の庁内組織である「伊賀市歴史的風致維持向上計画策定庁内検討会議」及び同会議ワーキンググループにおける課題整理、原案の検討、施策・事業案等の検討を行い、歴史まちづくり法第 11 条に基づく「伊賀市歴史的風致維持向上協議会」における計画案の検討、ならびにパブリックコメントによる市民意見の聴取を経て「伊賀市歴史的風致維持向上計画」として策定され

た。本計画の位置づけ及び策定体制を下図に示す。

### 3-1 伊賀市歴史的風致維持向上協議会

伊賀市歴史的風致維持向上計画の作成及び変更に関する協議ならびに計画の円滑な実施に係る連絡調整を行い、歴史的風致の維持又は向上に資する取り組みや、計画の推進状況の報告・評価に関すること等を所掌するため、歴史まちづくり法第11条に基づく「伊賀市歴史的風致維持向上協議会」を平成26年（2014）11月1日に設置した。

役 職	名 前 及 び 所 属 等
会 長	菅原 洋一 三重大学名誉教授
副会長	浅野 聡 國學院大學観光まちづくり学部 教授
委 員	松生 龍治 上野西部地区住民自治協議会 会長
委 員	牧野 頼悌 阿保地区住民自治協議会 会長
委 員	山下 育子 島ヶ原地区まちづくり協議会 広報部会長
委 員	滝井 利彰 伊賀市文化財保護審議会 会長
委 員	三重県教育委員会事務局社会教育・文化財保護課副参事
委 員	三重県県土整備部都市政策課 課長
委 員	伊賀市産業農林部 部長
委 員	伊賀市建設部 部長
委 員	伊賀市教育委員会事務局 事務局長
オブザーバー	国土交通省中部地方整備局 建政部 都市調整官

（令和7年（2025）4月1日現在）

### 3-2 伊賀市歴史的風致維持向上計画策定及び推進庁内検討会議

本計画の策定に向けて、必要な事項を検討し、計画の策定及び計画による実施事業を一体的かつ円滑に推進することを目的に、平成26年（2014）9月1日に「伊賀市歴史的風致維持向上計画策定庁内検討会議」を設置し、庁内の連絡調整、実施事業の調整、計画の進行管理、計画の変更など本計画及び計画による事業の推進に必要な調整を行い、平成30年度（2018）から「伊賀市歴史的風致維持向上計画推進庁内検討会議」を開催している。

部局名	役職名
未来政策部	未来政策課長
地域力創造部	文化振興課長
産業農林部	産業農林部長
	農林振興課長
	商工労働課長

産業農林部	観光振興課長
	中心市街地推進課長
建設部	建設部長
	道路河川課長
	都市計画課長
	建築課長
	住宅課空き家対策室長
消防本部	予防課長
上下水道部	下水道課長
教育委員会事務局	事務局長

(令和7年(2025)4月1日現在)

### 伊賀市歴史的風致維持向上計画（第2期）（案）の作成

#### 伊賀市歴史的風致維持向上計画推進庁内検討会議

未来政策部（未来政策課） 地域力創造部（文化振興課）  
 産業農林部（農林振興課・商工労働課・観光振興課・中心市街地推進課）  
 建設部（道路河川課・都市計画課・建築課・住宅課空き家対策室） 消防本部（予防課）  
 上下水道部（下水道課） 【事務局】伊賀市教育委員会（文化財課）

提案

意見

#### 伊賀市歴史的風致維持向上協議会

有識者 市民団体等 三重県（県土整備部・教育委員会）  
 伊賀市（産業農林部・建設部・教育委員会）  
 【事務局】伊賀市・伊賀市教育委員会

### 計画（案）の報告・申請、認定

伊賀市文化財保護審議会  
 伊賀市景観審議会

報告

報告

議会

意見

意見

市民  
 （パブリックコメント）

伊賀市長  
 伊賀市歴史的風致維持向上計画の決定

申請

認定

主務大臣  
 （文部科学大臣・農林水産大臣・国土交通大臣）

図1 伊賀市歴史的風致維持向上計画策定体制

## 4 計画策定の経緯

本市では平成 26 年（2014）7 月、第 2 次伊賀市総合計画を策定し、その基本構想で「私たちのまちは、伊賀流忍術発祥の地、松尾芭蕉の生誕地として、先人から受け継いだ歴史と文化、緑豊かな自然、その自然に育まれた農産物や特産品など、全国に誇れる宝が数多くあり、これらの資源は、私たちのまちの未来を切り拓いていくことができる素晴らしい可能性を秘めています」とし、さらに、同計画第 1 次再生計画で「歴史的風致維持向上計画の策定、認可に取り組み、計画に従って、歴史的なまちなみ等の保存整備を図ります」と目的を明確にしている。

これらを受け、豊富な歴史的資源を活かしたまちづくりを推進するために平成 28 年（2016）に「伊賀市歴史的風致維持向上計画」を策定して、さまざまな事業を進めてきた。本計画に基づく諸事業により、市の歴史的資産を活かしたまちづくりが進展したが、本市の歴史的風致を維持向上することにより、さらに地域の魅力と付加価値を得るため、第 2 期計画に着手することとした。

令和 7 年(2025)

2 月 6 日 第 20 回伊賀市歴史的風致維持向上協議会 2 期計画策定着手検討

3 月 15 日 国土交通省都市局景観 公園緑地・景観課との協議

4 月 23 日 島ヶ原地区（1 期計画重点地区）住民自治協議会役員会協議

5 月 15 日 第 21 回伊賀市歴史的風致維持向上協議会 2 期計画策定検討

5 月 30 日 国土交通省都市局・農林水産省農村振興局・文部科学省文化庁との協議

8 月 18 日 第 9 回伊賀市歴史的風致維持向上計画策定庁内検討会議

8 月 29 日 第 22 回伊賀市歴史的風致維持向上協議会 2 期計画策定検討

9 月 29 日 国土交通省都市局・農林水産省農村振興局・文部科学省文化庁との協議

10 月 10 日 第 10 回伊賀市歴史的風致維持向上計画策定庁内検討会議

10 月 17 日 第 23 回伊賀市歴史的風致維持向上協議会 2 期計画策定検討

11 月 6 日 国土交通省都市局・農林水産省農村振興局・文部科学省文化庁との協議

11 月 7 日 総合政策会議

## 第1章 伊賀市の概要

### 1 自然的・地理的環境

#### 1-1 伊賀市の位置・面積

本市は三重県北西部に位置し、東西約 30 km、南北約 40 km のやや南北に長い範囲を市域とし、総面積は 558.23km<sup>2</sup> である。また、近畿圏、中部圏の2大都市圏の中間に位置し、それぞれ車で約1時間の距離にあり、紀伊半島のほぼ中央に位置する。

周辺の自治体は、東は三重県津市及び亀山市、西は京都府相楽郡南山城村、奈良県奈良市及び山辺郡山添村、南は三重県名張市及び津市、北は滋賀県甲賀市が接する。

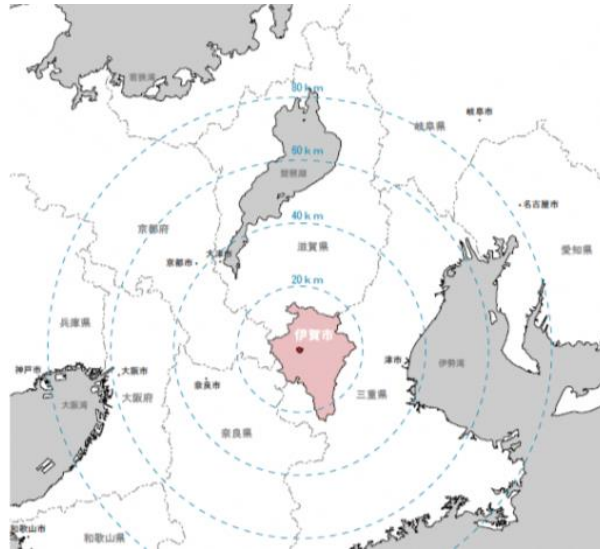


図2 伊賀市の位置

#### 1-2 地形

本市は、東を鈴鹿山脈・布引山地、西を大和高原、南を紀伊山地から派生する室生山地、北側を信楽高原で画された盆地である。

盆地の東側は布引山地の北端の霊山（766m）から、笠取山（842m）を経て市域の南端尼ヶ岳（957m）に至る。北側は、京都府から続く木津川断層によって画されていて、その延長に位置する笹ヶ岳（738m）が最高所となる。盆地は南が高く、北及び大和高原に続く西側は比較的標高が低く開けた印象を受ける。これらの山々に端を発した柘植川・服部川・久米川・木津川が盆地内を縫うように流れ、盆地北西部で合流してやがて大阪湾に流れ込む。

伊賀盆地と周囲の山々の境界部は、相対的に盆地側が落ち込む断層が発達していて、北側の信楽高原との間には、東北東—西南西方向にのびる木津川断層、盆地南東側と布引山地との間には、南北方向ないし北東から南西方向にのびる柘植断層・頓宮断層が直線的にのびる急傾斜の地形を形成している。また、盆地北西側の花ノ木丘陵や島ヶ原の丘陵地には、北北西から南南東にのびる三軒屋断層と、これに直交して木津川断層に平行する花ノ木、<sup>はった</sup>治田東方、西田原の



3つの断層が走り、これらの活動によって北落ちの傾動盆地が形成されたと考えられる。

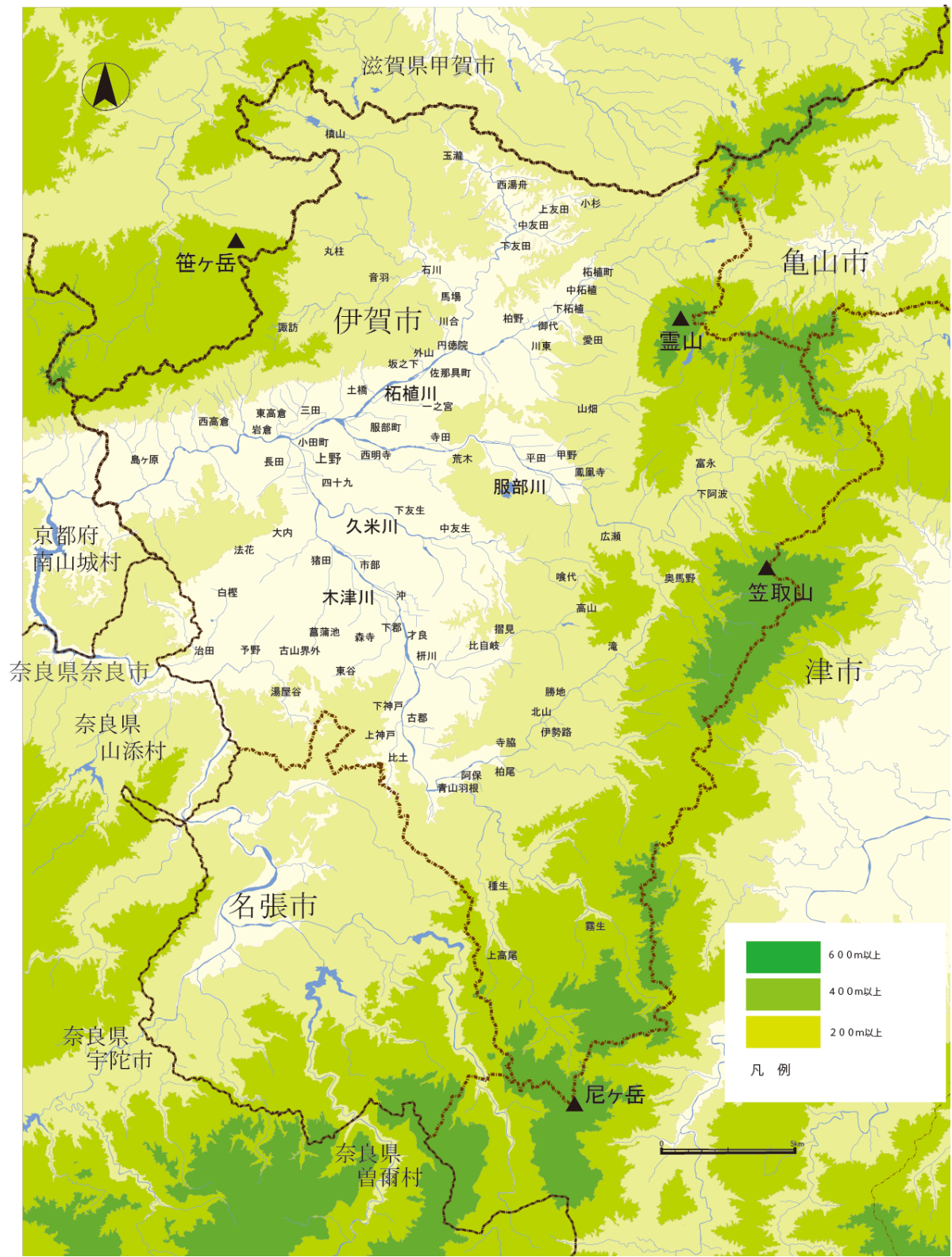


図3 伊賀市の地形 1/200,000

市域の地形は、山地・丘陵地・台地・低地の4つに分類できる。山地は標高300～700m、丘陵地は170～300m、台地は150～170m、低地は150m以下である。山地は、北部の諏訪や島ヶ原・丸柱、南部の種生・霧生地区や福川・奥鹿野、東部の阿波から奥馬野・高山にかけての地域である。丘陵地は里山風景が広がる地形で、例えば西部の法花・大内や蓮池から下友生、下神戸から古郡にかけてなど市内の各所に見られ、長田の柳生花崗岩や、荒木から蓮池・勝地にかけての領家変成岩など、中生代にさかのぼるものもあるが、多くは古琵琶湖層群の上野層を構成する市部・友生・喰代の各部層や、伊賀層の法花・炊村部層などである。

上野城下町区域から西明寺、柏野から柘植にかけて分布するのが台地で、段丘堆積物によって構成されている。

低地は、木津・服部・柘植川及びその支流に沿って堆積した沖積地であり、中小河川によって形成された小盆地も各所にみられる。盆地中央部の服部町、印代付近には地域最大の沖積地「万町の沖」が広がる。盆地内は標高130～160mで、沖積地の周辺は広がる丘陵地とあいまって自然豊かな景観を有している。

### 1-3 地質

伊賀盆地には、中生代に形成された山地をつくる花崗岩類、変成岩類の基盤を覆うように、往時の沼地や池、川などに堆積してできた地層が分布している。これらの層は、湖に堆積した地層とともに一連の地層を形成していて、伊賀盆地の北に位置する近江盆地にも連続しており、かつての琵琶湖とその周辺の平野に堆積した地層という意味で「古琵琶湖層群」と呼ばれている。

古琵琶湖層群の厚さは全体で1,500mを超え、下位から上野層・伊賀層・阿山層・甲賀層・蒲生層・草津層・膳所層・堅田層・高島層の9つの層に区分されていて、その堆積の場は、最初は伊賀盆地周辺にあり、次第に北に移動して現在の琵琶湖の位置にたどり着いたと考えられている。そして、古琵琶湖層群に堆積した粘土層が耐火性のある伊賀焼の原料となり、伊賀米を生み出す土壌となるだけでなく、古琵琶湖に由来する盆地地形は、伊賀の人びとの歴史文化、生活習慣に大きな影響を与えている。

盆地周辺に分布している古琵琶湖層群及び段丘堆積層、崖錐性堆積層からわかる地質構造は、主に東北東—西南西方向と、北北西—南東方向の2方向に延びる断層と撓曲構造である。東北東—西南西方向の断層では、木津川・花ノ木・



図4 伊賀地域の地質総括図と伊賀地域の地質概略図

(『上野市史』自然編 産業技術総合研究所 地質調査総合センター作成「地質図」より加筆修正)

勝地・西田原の各断層である。北北西—南東方向の断層は、頓宮・柘植・油日の各断層で鈴鹿山脈・布引山地との境界をなしている。

## 1-4 水系

本市を流れる主要河川は、北部を西流する柘植川・服部川、南部から北流する木津川に伊賀盆地の北西部で合流し流下したのち、京都府で淀川と名前を変えて大阪湾へと至る。これら主要河川及び支流によって形成された盆地地形が伊賀地域特有の気候風土の源となっている。木津川上流域に位置するこれらの河川は水質が良く、特別天然記念物であるオオサンショウウオの生息域となっている。

## 1-5 気象

本市の気候は、夏の蒸し暑さと冬の底冷え、朝夕と日中の気温差など、典型的な内陸型気候の特徴を示している。統計によると、平年値（過去30年間 平成3年（1991）～令和2年（2020））の年平均気温は、14.6℃と県内の観測所ではいちばん低い。8月が最も平均気温が高くなり26.7℃、1月が最も低く3.5℃



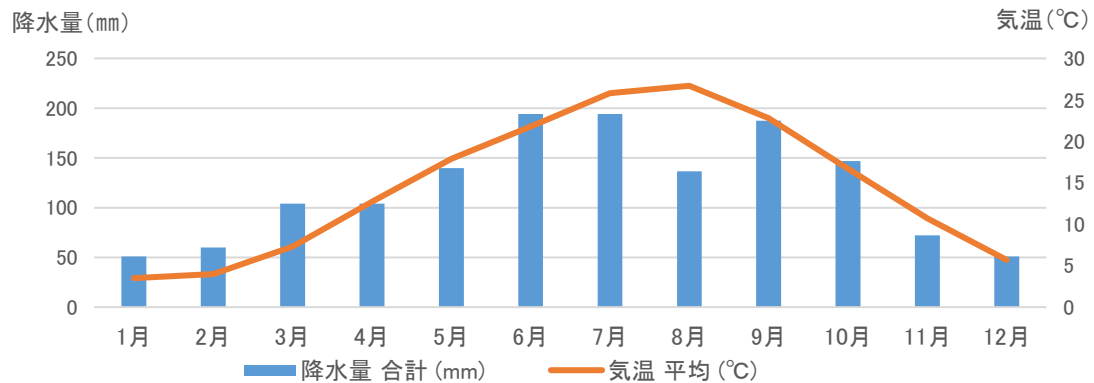


図5 月別の気温・降水量

である。また、日較差・年較差が大きく、日較差は特に4月が12.4℃と大きい。年較差は23.2℃である。これらの特徴から、晴天時の放射冷却で朝夕は肌寒くなり、放射霧と川からの蒸気霧とで、盆地内や山間の低地では濃霧が多く発生する。特に10・11月に顕著で11月の霧日数は平年値で6.4日である。

降水量は、盆地で山越えの風下にあたるため県内では比較的少なく、降水量

表1 「上野地区（伊賀市）」の平年値（年・月ごとの値）主要要素

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間 (合計時間)	大気現象	
	合計 (mm)	平均 (℃)	日最高 (℃)	日最低 (℃)	平均 (m/s)	最多 風向		雪日 数※	霧日 数※
1月	50.9	3.5	8.3	-0.6	3	西	125	13.1	1.7
2月	60	4	9.4	-0.5	2.9	西	121	11.9	1.5
3月	104.2	7.3	13.4	2	2.8	西	154.7	5.7	1.9
4月	104.2	12.7	19.2	6.8	2.7	北北東	174.8	0.5	1.5
5月	139.7	17.9	24	12.4	2.5	北北東	183.4	0	2.1
6月	194.3	21.8	26.9	17.5	2.3	北北東	132.8	0	1.2
7月	194.3	25.8	31	21.9	2.2	北北東	155.3	0	2
8月	136.4	26.7	32.5	22.6	2.3	北北東	191.7	0	1.9
9月	187.3	22.8	28.1	18.7	2.3	北北東	142	0	2.2
10月	146.7	16.7	22.2	12.1	2.2	北北東	143.4	0	5.1
11月	72.1	10.7	16.5	5.7	2.1	西	136.1	0.3	6.4
12月	50.8	5.7	10.9	1.2	2.7	西	135	6.9	3.6
年	1440.9	14.6	20.2	10	2.5	西	1806.9	38.7	30.9

資料年数は1991-2020年、ただし※印は1997-2020年

(気象庁H・Pより)

の平年値は 1,440.9 mm となっている。月別で見ると 6 月、7 月、9 月の順に降水量が多く、12 月が最も少なく 50.8 mm である。しかし、冬季には雪雲を含んだ北西季節風により、降雪をもたらす場合がある。雪日数の平年値は、1 月が最も多く 13.1 日、次いで 2 月の 11.9 日である。

## 2 社会的状況

### 2-1 市町村の合併経緯

現在の市域は、明治 22 年（1889）の市制・町村制により 1 町 30 村に編成されていた。本市は、平成 16 年（2004）に、上野市・伊賀町・阿山町・青山町・島ヶ原村・大山田村の 1 市 3 町 2 村が合併して成立したが、その過程は以下のとおりである。

【上野市】 昭和 16 年（1941）9 月、上野町と小田・<sup>ながた</sup>長田・<sup>にい</sup>花之木・新居・三田の各村が合併し上野市が成立した。その後、昭和 25 年（1950）8 月に府中・<sup>いだ</sup>猪田村、12 月に中瀬・<sup>とも</sup>友生村が合併し、続いて昭和 30 年（1955）1 月に花垣・依那古・<sup>かんべ</sup>比自岐、3 月に神戸村、昭和 32 年（1957）7 月に古山村が合併し上野市となった。

【伊賀町】 昭和 30 年（1955）に壬生野村と西柘植村が春日村となり、昭和 17 年（1942）に東柘植村から町制施行した柘植町が昭和 34 年（1959）に春日村と合併し、伊賀町が成立した。

【阿山町】 昭和 29 年（1954）10 月に川合村と玉瀧村が阿拝村となり、同年 12 月に阿拝村と<sup>ともだ</sup>鞆田村により阿山村となった。昭和 30 年（1955）2 月に阿山村に丸柱村の一部が編入され、昭和 42 年（1967）12 月に阿山村から阿山町となった。

【青山町】 昭和 30 年（1955）3 月に、大正 9 年（1920）に町制施行した阿保町と上津・種生・矢持の 3 村が合併して青山町となった。

【島ヶ原村】 明治 22 年（1889）から平成 16 年（2004）の平成の合併まで 115 年間 1 村独立した状態であった。

【大山田村】 昭和 30 年（1955）4 月に山田・布引・阿波の 3 村が合併して大山田村となった。

### 2-2 土地利用

市域は約 62% が森林で、ほかに農用地が約 14%、宅地が約 5 % を占める。低地・台地は少なく、丘陵地が多くなっているため、限られた平地や台地を農地

や宅地として利用している。市東部から南部にかけての山間・丘陵地は、昭和43年（1968）に鈴鹿国定公園、昭和45年（1970）に室生赤目青山国定公園に指定されている。また、伊賀市合併以前から、旧市町村単位で農業振興地域の指定を受けており、その中で、圃場整備<sup>ほ</sup>などが行われた優良農地を中心に農用地区域が点在している。また、丘陵地等を開発し住宅団地や工業団地などが形成されている。

都市計画区域の指定状況をみると、合併前の上野地域（旧市域の全域）、伊賀地域、阿山地域、青山地域（各旧町区域の一部）が伊賀都市計画区域として指定されている。その面積は、31,309haである。

伊賀都市計画区域の面積 31,309ha のうち、上野地域の一部が用途地域に指定されており、その面積は1,678.3haである。用途地域の面積比率は住居系用途23%、商業系用途8%、工業系用途16%となっている。

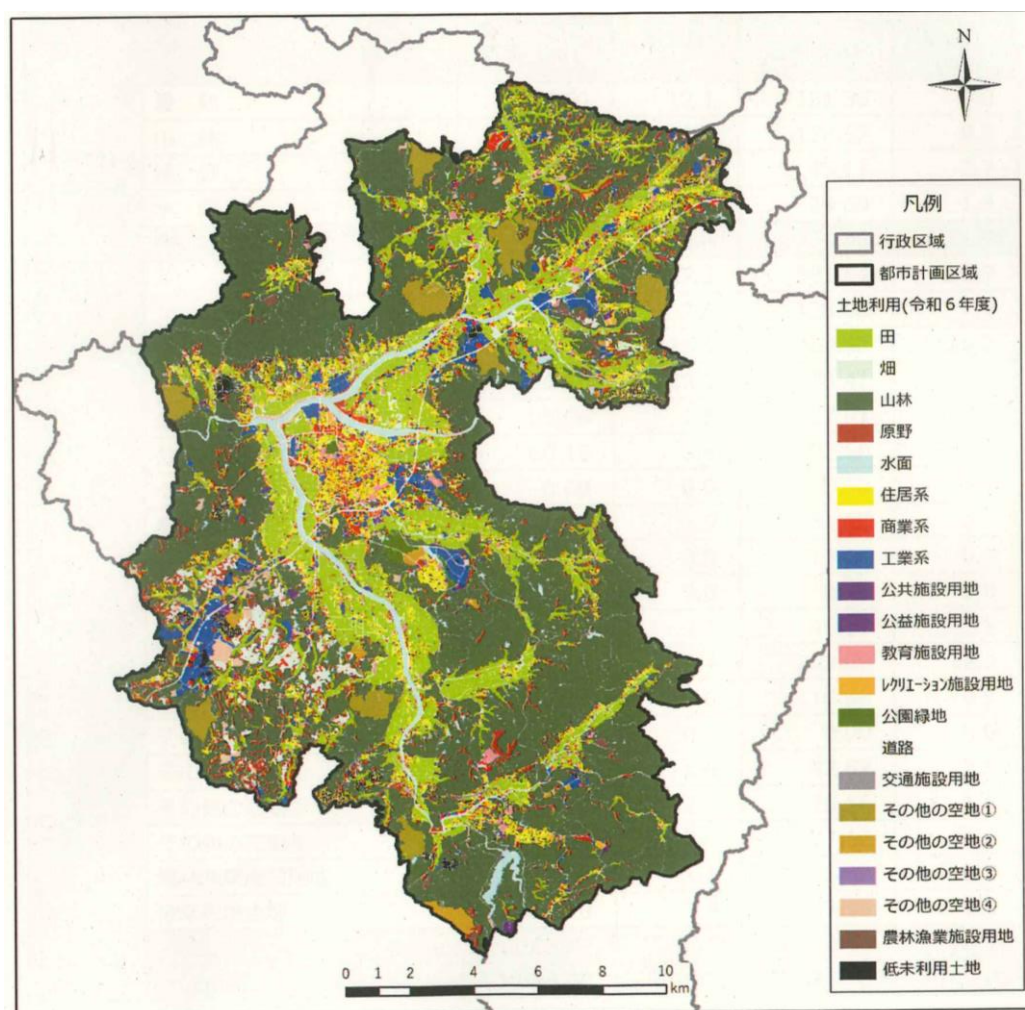


図6 都市計画区域の土地利用現況図 令和6年(2024)

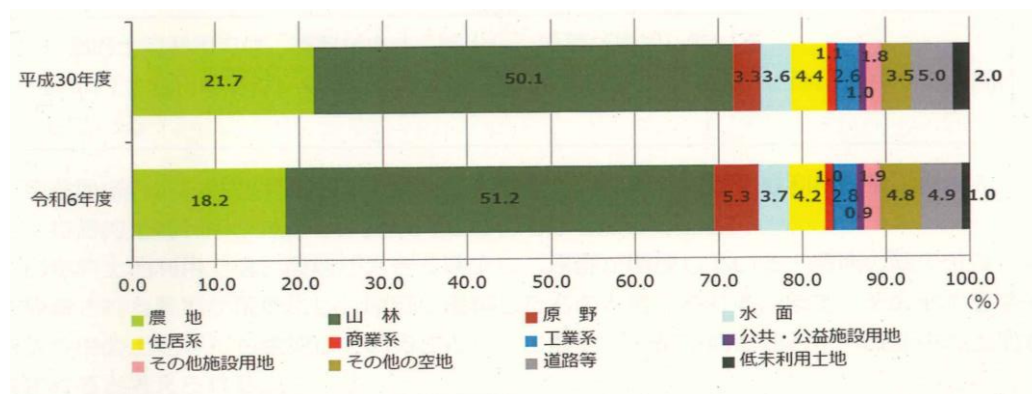


図7 都市計画区域の土地利用現況の変化

## 2-3 人口動態

令和7年(2025)3月31日現在の本市の人口は84,060人である。市域の人口は昭和45年(1970)頃までは一貫して減少傾向にあったが、その後、企業の進出や住宅団地の開発などにより人口は緩やかな増加傾向に転じた。しかし、平成7年(1995)頃を境に減少傾向が続いており、とくに中山間部の人口減少は著しい。

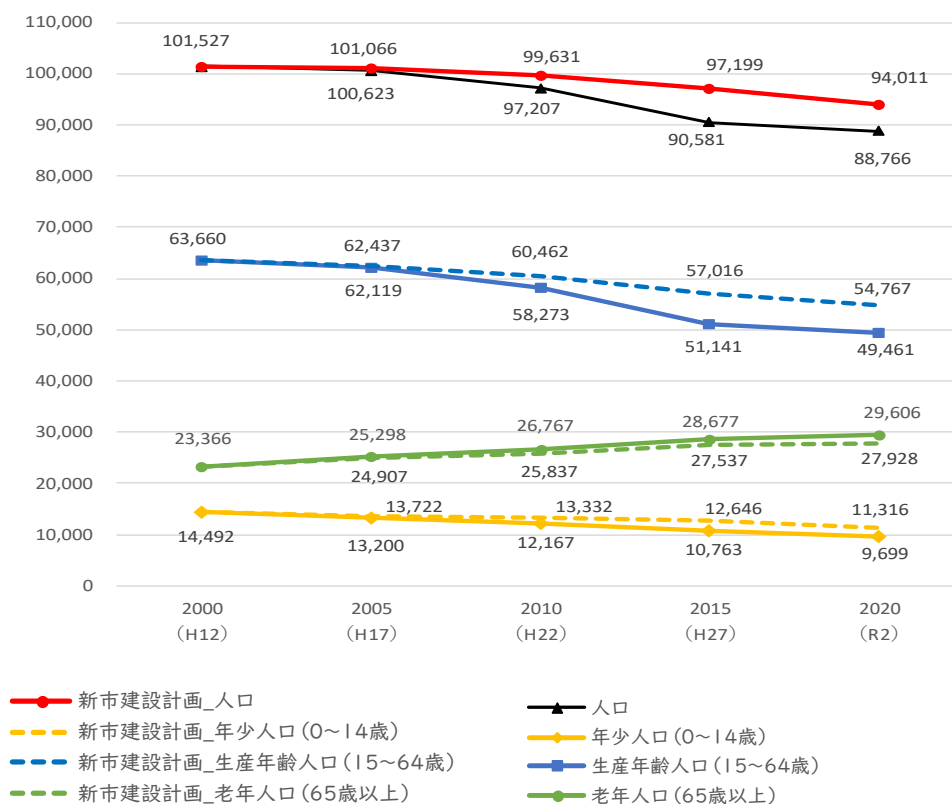


図8 伊賀市の年齢3区分人口の推移

表 2 伊賀市の将来人口推計

年	2015 (H27)	2020 (R2)	2030 (R12)	2040 (R22)	2050 (R32)	2060 (R42)
市将来展望	90,581	84,156	73,653	66,448	61,035	56,466
社人研推計準拠	90,581	84,023	70,883	58,270	46,677	36,566

※社人研：国立社会保障・人口問題研究所

新市建設計画による人口推移をみると、年齢階層別では、年少人口（15歳未満）と生産年齢人口（15～64歳）の割合が減少する中、老年人口（65歳以上）の割合が増えてきている。地域別に高齢化状況をみると、上野中心市街地と中山間地において高齢化率が高くなっている。また、住宅団地を抱える地域では、同世代の世帯が急激に流入したため、高齢化も急激に訪れることが予測されている。さらに、総人口に占める若年女性人口（20～39歳）の割合をみると、総人口より早い速度で減少が進んでいることがみてとれ、今後の人口減少抑制を考えるうえで、大きな課題となっている。将来人口の推計については、令和22年（2040）には66,000人余り、令和42年（2060）には56,000人余りまで減少することが想定されている。

## 2-4 交通機関

本市は、大阪・名古屋・京都の都市部から概ね100km圏内にあり、古来、畿内と東国を結ぶ要地に位置した伊賀国は、木津から加太峠に至る大和街道、名張から青山峠を経て津へ至る初瀬街道、上野から長野峠を経て津へ至る伊賀街道の3本の街道があり、伊賀国と他国を結ぶ幹線道路として機能した。大和街道には西から島ヶ原・上野・佐那具・上柘植、初瀬街道は阿保・伊勢地、伊賀街道には、平田・平松の各宿場が置かれた。現在は若干のルートを変えながらも、大和街道は国道25号・国道163号、初瀬街道は国道165号、伊賀街道は国道163号として機能している。上野市街地と名張市を結ぶ国道368号、上野市街地と阿保を結ぶ国道422号は伊賀地域内の主要道路として機能している。

また、昭和40年（1965）に開通した自動車専用道路の名阪国道は、市域の北東から南西を横断し、接続する西名阪自動車道・東名阪自動車道とともに大阪圏と名古屋圏を結ぶ大動脈として機能している。

鉄道交通としては、市の北部にJR西日本関西本線の5駅（柘植・新堂・佐那具・伊賀上野・島ヶ原）があり、亀山を通じて名古屋とつながる東端の柘植駅は、関西本線から分岐する草津線を通じて草津・京都へとつながる。西端の



島ヶ原駅からさらに西は加茂・木津を通じて奈良・大阪へとつながる。市の南部には、近畿日本鉄道大阪線の4駅（伊賀神戸・青山町・伊賀上津・西青山）があり、東は伊勢中川、西は大和八木を通じて、愛知県や大阪府の主要都市と結びついている。

北部のJR伊賀上野駅と南部の近鉄伊賀神戸駅との間は、市域を代表する公共交通である伊賀鉄道により結ばれ、15駅（伊賀上野・新居・西大手・上野市（忍者市）・広小路・茅町・桑町・四十九・猪田道・市部・依那古・丸山・上林・比土・伊賀神戸）が設置されている。

市内のバスについて、営業路線バスは伊賀上野駅一名張駅間の上野名張線をはじめ5路線、廃止代替バスは上野市駅—新堂駅南口間の柘植線等5路線あり、いずれも上野市駅を中心に各地域をつないでいる。また、営業バス・廃止代替

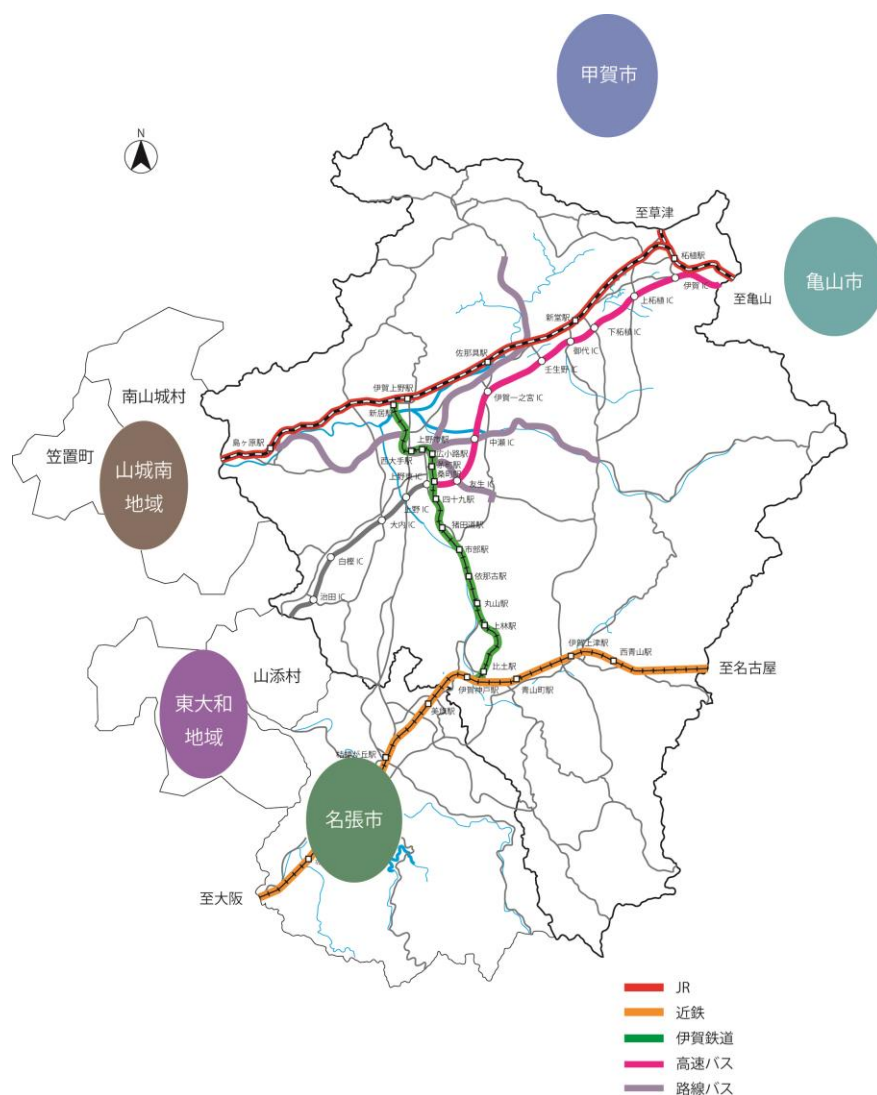


図9 公共交通ネットワーク図

表 3 行政バス・地域運行バス一覧

路線名	運行地区	日運行本数	路線機能
青山行政バス	青山地区	21.5 往復	地域 アクセス バス
コミュニティバス（にんまる）	上野地区	19.0 往復	
いがまち行政サービス巡回車	伊賀地区	17.0 往復	
しまがはら行政サービス巡回車	島ヶ原地区	8.0 往復	
阿山行政サービス巡回車	阿山地区	14.0 往復	
大山田行政サービス巡回車 （どんぐり号）	大山田地区	9.0 往復	
比自岐コスモス号	上野地区	6.0 往復	
かんべ北斗号	コメリ青山店 -伊賀鉄道丸山駅	年末年始を 除く火・金 曜日	地域生活 交通
	コメリ青山店 -領主谷公民館		

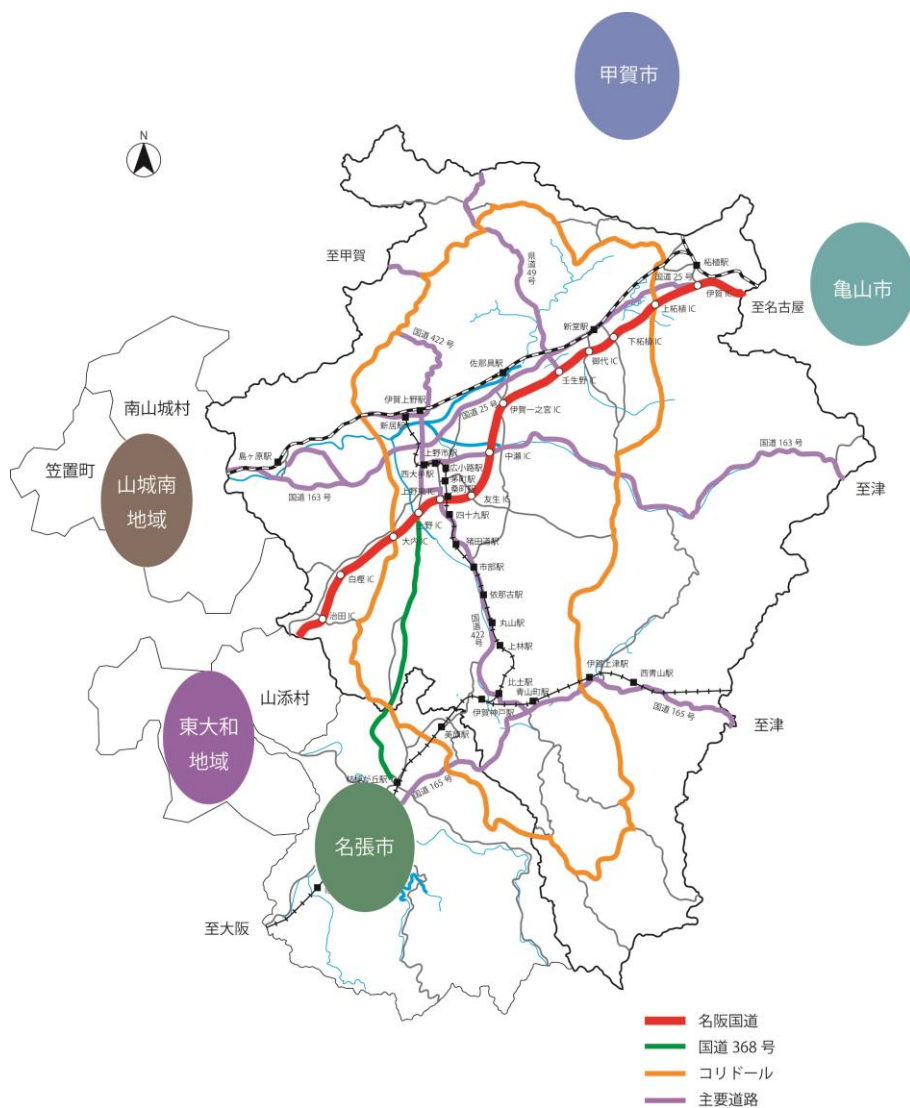


図 10 道路ネットワーク図

バスを補完する形で各支所管内を循環する行政バスがある。その他地域が主体となって運行している地域運行バスとして「かんべ北斗号」がある。

## 2-5 産業

内陸部の盆地に位置する本市は、高度経済成長期以前は、上野城下町区域の手工業とそれ以外の区域の農業が主たる産業であった。1970年代以降、名阪国道沿いを中心に工業団地が建設され、県内でも有数の工業地帯となっている。

平成2年（1990）から平成27年（2015）の産業別就業人口構成比の推移は、第1次産業就業者数が半減し、構成比においても5.1%になった。第2次産業就業者数については、平成2年（1990）から平成7年（1995）までの期間は増加したものの、平成22年（2010）までは減少し、構成比も36.1%と約7ポイントの減少となっている。また、第3次産業就業者の構成比は平成17年（2005）まで増加し、平成12年（2000）以降は過半数を占めている。

平成27年（2015）の時点で、農林業を主体とする第1次産業が2,620人、製造業・建設業を主体とする第2次産業が17,274人、サービス業・卸小売業を主体とする第3次産業が24,059人となっている。

産業別に市内の総生産額の推移を見ると、平成20年（2008）から平成21年（2009）にかけてリーマンショックの影響を受けて大きく落ち込んだが、平成25年（2013）から緩やかに回復し、平成28年（2016）以降は5,000億円を超える

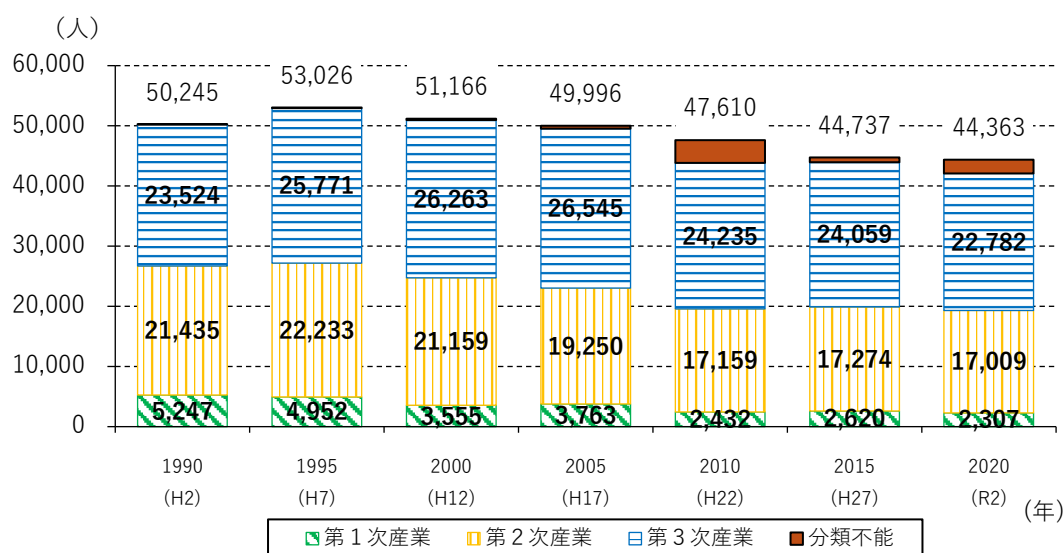


図 11 常住地における就業者数の推移（『伊賀市総合計画第3次基本計画』より）

常住地における就業人口：常住地とは、同一の場所に3か月以上にわたって住んでいるか、または3か月以上にわたって住むことになっている場所をいう。つまり、伊賀市在住の市民のうちの就業人口をみるもの。

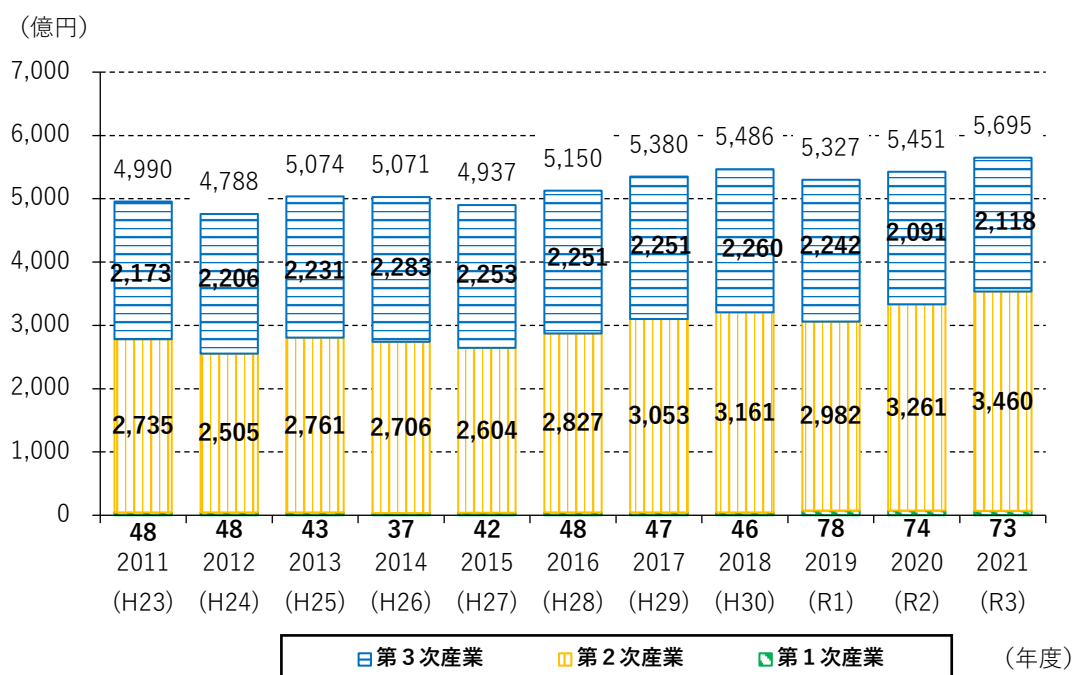


図 12 産業別市内総生産の推移 (『伊賀市第3次総合計画』より)

水準で推移している。

第1次産業は、平成23年(2011)に48億円であったのが、平成26年(2014)には37億円まで減少したが令和元年(2019)は上昇に転じている。総生産額に占める割合は1%前後である。第2次産業は、平成23年(2011)から平成28年(2016)に至るまで2,700~2,800億円で概ね55%程度、現在は60%まで上昇している。第3次産業は2,000~2,300億円で、近年は生産額、割合ともに減少傾向にある。なお、本市の地場産業として、伊賀組紐と伊賀焼がある。前者は昭和51年(1976)、後者は昭和57年(1982)にそれぞれ通産大臣(当時)より伝統的工芸品に指定されている。

## 2-6 観光

観光は、伊賀市中心部の上野城、伊賀流忍者博物館、松尾芭蕉関連施設のほか、青山高原や余野公園などの自然資源、農林業などに係る様々な交流資源、温泉やリゾート施設など多くの地域資源があり、近年の観光入込客数の動向は微増傾向にある。各地の高速道路から自動車専用道路の名阪国道を經由して自動車で訪れる場合や、JR、近畿日本鉄道などの公共交通機関を利用したの来訪となっている。本市は、大阪圏・名古屋圏からそれぞれ約100kmの位置にあり日帰りの観光客が多い。しかし、近年では古民家を活用したホテルの開業などもあり、滞在型の観光客もみられる。

表4 伊賀市へ訪れる観光客の諸データ

指標項目・年度	2019	2020	2021	2022	2023
入込客数	2,139,884	1,494,411	1,466,212	1,620,246	1,657,860
旅行消費額（日帰り単価） （千円）	4.5	4.4	4.9	5.2	3.7
旅行消費額（宿泊単価） （千円）	18.1	16.4	19.6	23.9	21.4
延べ宿泊者数（人） （外国人旅行者）	249,633 (30,709)	157,914 (731)	167,675 (468)	232,213 (3,027)	209,193 (8,100)
来訪者満足度（％）	78.9	81.8	82.2	75.8	76.8
リピーター率（％）	48.7	59.0	58.7	59.2	52.7

表5 主要観光施設入込客数

施設名 年度	2019	2020	2021	2022	2023
伊賀上野城	101,306	51,563	51,274	74,770	77,737
伊賀流忍者博物館	171,756	69,806	57,951	83,481	109,806
だんじり会館	20,442	10,708	4,410	5,968	5,340
芭蕉翁生家	0	0	0	3,194	3,622
蓑虫庵	3,217	1,714	1,615	2,221	2,209
芭蕉翁記念館	13,498	7,014	7,042	8,589	9,381
旧小田小学校	2,411	1,050	1,554	1,435	1,304
旧崇広堂	10,871	6,172	10,438	10,027	9,239
入交家住宅	2,961	1,495	4,037	3,728	2,574
伊賀伝統伝承館（くみひも）	18,255	10,580	9,185	10,883	10,690
ヒルホテルサンピア伊賀	183,450	133,598	137,592	141,798	148,323
伊賀焼伝統産業会館	2,148	7,412	8,050	8,631	6,708
伊賀の里モクモク手づくり ファーム	274,369	168,726	195,438	232,280	229,112
ふるさとの森公園	4,371	2,360	1,949	2,135	3,348
伊賀の国大山田温泉さるびの	226,586	153,856	138,221	169,777	178,367
新大仏寺	46,520	38,990	30,770	21,380	42,570
島ヶ原温泉やぶっちゃ	134,085	105,504	113,282	136,140	139,327
余野公園	39,401	23,998	20,572	24,168	20,768
道の駅「いが」	306,262	234,566	233,795	257,300	264,937
青山高原	261,090	244,800	229,800	203,300	187,030
メナード青山リゾート	82,847	38,289	30,000	26,684	10,012
ミュージアム青山讃頌舎		2,318	3,006	1,836	2,226



### 3 歴史的背景

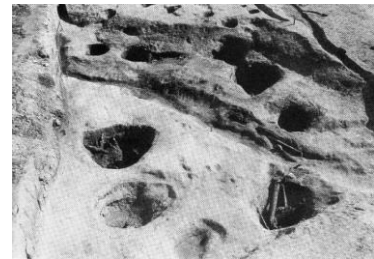
#### 3-1-1 先史（旧石器から古墳時代）

##### ① 伊賀びとのはじまり

伊賀盆地に人々が住み始めたのは、約3万年前から約1万6千年前にかけての後期旧石器時代のことであった。比土遺跡（比土）では、この時期の翼状剥片が出土しているほか、田中遺跡（猪田）ではチャート製のナイフ形石器が出土しており、伊賀における「ヒト」の活動痕跡を知ることができる。

縄文時代になると、木津川上流域の花代遺跡（青山羽根）や川上中縄手遺跡（川上）で早期にさかのぼる土器がまとまって出土しているほか、寺田の岡山公園で当該期の尖頭器が出土していることが古くから知られている。早期から前期にかけては、ゆめが丘の造成工事に先立ち実施した源鳥A遺跡や奥小波田遺跡の調査で縄文土器や石器が出土している。中期から後期になると高野遺跡（佐那具町）で土坑や柱穴、伊賀国府跡追越地区（外山）で住居跡が検出されるなど、人々の生活痕跡が増え始める。

晩期の遺跡として、森脇遺跡（市部）がある。この遺跡では小河川に9基の土坑が検出された。内部からはトチやカシなどの木の実が出土し、人々が流水によりアク抜きを行うため貯蔵穴として使用したとされる。住居跡以外の遺構として貴重である。



森脇遺跡(市部)の貯蔵穴

##### ② 稲作の伝播と弥生文化

弥生時代前期の遠賀川系土器が小芝遺跡（服部町）や奥城寺遺跡（比土）などで出土しており、前期の集落は河川沿いの低湿地に水田が開かれていたと考えられる。中期になると、印代東方遺跡（印代）や森脇遺跡で住居跡が確認され、三田遺跡（三田）でこの時期の土器が多く出土した。北切遺跡（富永）では方形周溝墓が確認されており、周溝墓を築造する社会集団が形成されてきたことがうかがえる。

後期になると遺跡数は増加する。才良遺跡（才良）では、環濠の一部が検出され、多量の土器が出土している。また、浮田遺跡（上神戸）や長良遺跡（印代）などで方形周溝墓が確認されている。さらに、比土・柏尾・千歳・中友生ではこの時期の銅鐸が見つかっていることから、墓制や祭祀を



東山古墳(円徳院)の発掘調査

通じて地域社会がまとまりはじめたことを示している。

### ③ 伊賀の古墳と王たち

古墳時代になると地域のまとまりは、古墳の築造というかたちで表象され、市内においては、柘植・服部・木津の各河川にそれぞれ展開した首長墓からその状況を知ることができる。

県内最古に位置づけられる3世紀代にさかのぼる東山古墳（円徳院）は、道路建設に伴い実施された調査で、長径21mの楕円形の墳丘に長さ4.5mの割竹形木棺が見つかり、木棺内からは四獣鏡・剣・銅鏃などが出土した。東山古墳が所在する柘植川流域では、5世紀になると県内最大の全長188mを誇る前方後円墳、御墓山古墳（佐那具町）が築かれ、その系譜は4基の前方後円墳を含む柘植川北岸の外山・鷺棚古墳群（外山）へとつながり、最終的には7世紀代の巨大な石室を有する勘定塚古墳（外山）の築造に至る。なお、柘植川流域では、金銅装馬具が出土したキラ土古墳（佐那具町）や宮山1号墳（馬場）など首長系譜から分派したと思われる前方後円墳もある。



ワキ塚1号墳(上神戸)出土甲冑

一方、市域の東部を流れる服部川流域では、標高310mの丘陵上に全長96mの車塚古墳（荒木）が築造され、その系譜は大山田地区に所在する5世紀後半の寺音寺古墳（炊村<sup>かしきむら</sup>）、6世紀前半の横穴式石室を埋葬施設とする鳴塚古墳（鳳凰寺<sup>ぼうじ</sup>）へと続く。

市域を南東から北西に貫流する木津川の上流域では、5世紀初めから6世紀前半の5基の前方後円墳を中核とする美旗古墳群が形成される。最初に築造された殿塚古墳（上神戸・名張市）は後円部側が市域に含まれるが、その陪墳とされるワキ塚1号墳（上神戸）からは、三角板革綴衝角付冑<sup>さんかくばんかわとじしょうかくつきかぶと</sup>、長方板革綴短甲<sup>ちやうほうばんかわとじたんこう</sup>をはじめ、鉄剣・鉄鏃・鉄鎌・銅鏡など豊富な副葬品が出土した。



前塚35号墳(寺田)横穴式石室石室

美旗古墳群とは系譜が異なるが、市域のほぼ中央に位置する石山古墳（才良）は全長120mの前方後円墳であるが、昭和23年（1948）か

ら昭和 26 年 (1951) にかけて京都大学により発掘調査され、3 基の埋葬施設が見つかるとともに、多様な家形埴輪を含む形象埴輪、後円部を方形に囲む円筒埴輪列、石釧や鍬形石などの腕輪形石製品、石製の刀子や鍬など石製模造品が大量に出土した。石山古墳の出土品からは、伊賀の王が畿内のヤマト王権と強い結びつきがあったことを裏付けている。

6 世紀前半から展開するのが群集墳である。市内最大規模の群集墳である久米山古墳群は、5 世紀前半に築造された 6 号墳を除けば、6 世紀前半から多数の古墳が築造されるようになり、6 世紀中ごろから木棺直葬墳から横穴式石室墳へ変化していく。また、木津川上流域では、南山ノ奥 6 号墳<sup>ふるこおり</sup>（古郡）といった多量の副葬品を有する木棺直葬墓<sup>かみごおり</sup>が知られるほか、横穴式石室を埋葬施設とする天童山古墳群（上郡）、中出向古墳群（青山羽根）がある。

一方、柘植川北岸の丘陵上には、石打古墳群（西条<sup>にしじょう</sup>）や外山・鷺棚古墳群、波敷野古墳群（波敷野）など横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が展開する。服部川流域においても前塚・桐ノ木古墳群（寺田）、鳳凰寺古墳群（鳳凰寺）などが形成される。

#### ④ 古墳時代の祭祀とくらし

城之越遺跡（比土）では、古墳前期から始まる祭祀にかかる大溝が検出された。3 カ所の井泉から湧き出る水を 1 カ所にまとめ、岬状となる合流点で祭祀が執り行われていたとされる。湧水点と大溝には貼り石が施され、清浄な場を作り出している。城之越遺跡は水に関わる祭祀を知る上で、全国的にも貴重な遺跡として位置づけられている。

住居跡が確認されている遺跡として、前期の北中溝遺跡（円徳院）、中期から後期の宮ノ森遺跡（千歳）や小芝遺跡（服部町）、後期の天道遺跡（西之澤）や羽根中島遺跡（青山羽根）がある。これらの遺跡では、中期から後期にかけてカマドが普及し、土器の種類や形が変化することが明らかになっている。北堀池遺跡（大内）では古墳時代前半の水田跡が検出され、多くの木製農具が出土した。



城之越遺跡(比土)



宮ノ森遺跡(千歳)出土の土器

### 3-1-2 古代（飛鳥・奈良・平安時代）

#### ① 壬申の乱と伊賀

天智天皇 10 年（672）に起こった古代史最大の内乱である壬申の乱では、伊賀の地も舞台となった。『日本書紀』によれば、吉野を出た大海人皇子は<sup>なぼり</sup>隠<sup>のうまや</sup>駅家を焼き、伊賀郡に入って伊賀駅家を焼き、伊賀の中山・荊萩野を経て積殖の山口から伊勢国へと逃れた、とあることから、隠駅家や伊賀駅家といった地方行政制度を担う地域の施設が、このころ整備されつつあったことがうかがえる。また、「畿内は名墾の横河なり」と『日本書紀』に記され、畿内に隣接する古代伊賀国は、天武天皇 9 年（680）伊勢 4 郡を割いて成立したとされる。



図 12 壬申の乱の大海人皇子脱出経路図

伊賀国の古代豪族を代表する者として、阿閉臣と伊賀臣がいる。阿閉臣の名は『日本書紀』にもみられ、奈良時代には阿拝郡の郡領を歴任していた。一方、伊賀臣は伊賀国造の系譜をひき、伊賀郡を中心に活動していた。阿閉臣は柘植川流域、伊賀臣は木津川流域に、それぞれ前代に前方後円墳を築造した首長系譜につながる氏族と考えられる。彼らは奈良時代になると、郡領などの地方官人（郡領）となる者と中央官人（中下級役人）化する者に分かれていった。

#### ② 律令制の展開と伊賀国

奈良時代の伊賀国は、阿拝・伊賀・山田・名張の 4 郡で構成されていた。名張郡を除く 3 郡が現在の本市に相当する。阿拝郡は、柘植・川合など 6 郷、『延喜式』神名帳に記載された式内社は 9 座ある。伊賀郡は、<sup>あ お</sup>阿保・阿我など 6 郷、式内社 11 座、山田郡は木代・川原・竹原の 3 郷、式内社 3 座である。

和銅 3 年（710）の平城遷都に伴い東海道が伊賀国北部を通ることとなり、和銅 4 年（711）に新駅家が設置された。新駅家は、官舎遺跡（東高倉・西高倉）に比定されていて、東高倉から三田にかけて古代道路の痕跡が残されている。また、古代の駅家や道路とともに整備されたのが、天皇が臨時に滞在する頓宮で



三田廃寺(三田)出土軒瓦



あった。市域南部の阿保には阿保頓宮跡があり、北部の中柘植の「斎宮芝」も斎王群行路の途次の頓宮伝承地である。

この時代の遺跡に目を向けると、古代寺院や官衙など、時代を象徴する遺跡が多数所在する。7世紀代に急速に広がる古代寺院は、伊賀国では1郡に1寺が建立され、阿拝郡の三



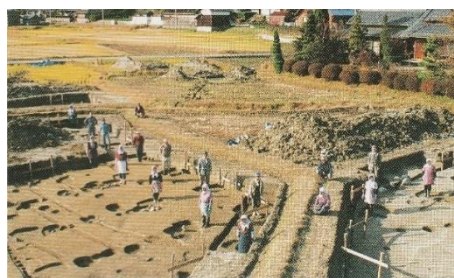
鳳凰寺廃寺(鳳凰寺)に残る礎石

田廃寺(三田)、伊賀郡の財良寺跡(才良)、山田郡の鳳凰寺廃寺(鳳凰寺)、名張郡の夏見廃寺(名張市夏見)が建立された。三田廃寺では、創建時の素弁蓮華文軒丸瓦が出土しているほか、法隆寺式・東大寺式・平城宮式の軒瓦が確認されている。また、旧丸山中学校西側に一辺約100m四方の寺域が想定される財良寺跡では、奈良県桜井市の栗原寺と同じ文様の軒丸瓦がみられ、中央との結びつきがうかがえる。また、鳳凰寺廃寺では、瓦を製作する際に使用する型が三田廃寺と同じの素弁蓮華文軒丸瓦が出土しているほか、当時の主要建物の礎石や塔心礎と思われるものが残されている。

古代伊賀国の中心地に所在した伊賀国庁跡(坂之下)は、国庁跡の中心域である政庁域に一辺40m強の掘立柱塀で区画された中に正殿と東西の脇殿が配置され、時期によって正殿の前後に前殿や後殿が設けられた。伊賀国庁跡が立地する場所は、古代の東海道上に位置し、西条の柘植川に面した箇所には「国府湊」の地名が残る。国庁跡周辺は、北側の丘陵に4基の前方後円墳を含む外山・鷺棚古墳群が所在する古墳時代からの拠点であるとともに交通の要地であった。

伊賀国庁跡の真南5kmの位置には、聖武天皇の詔により建立された伊賀国分寺跡(西明寺)と国分尼寺跡である長楽山廃寺(西明寺)がある。伊賀国分寺跡は東西220m、南北240mの土塁で囲まれた寺域に金堂跡・講堂跡・中門跡が一直線に並び、金堂の東側に塔跡がある。長楽山廃寺跡は、金堂跡と講堂跡が確認されていて、「L」字状の低い土塁で囲まれている。伊賀国庁跡と伊賀国分寺跡は一直線上に位置し、伊賀国内の伝路を介して結ばれ、計画的に配置されていたと考えられている。

古代の集落としては、歌野遺跡(広瀬)や西沖遺跡(広瀬)、川南A遺跡(勝地)などのように竪穴住居で構成される遺跡がみられ



発掘調査当時の伊賀国庁跡(坂之下)



る一方、森脇遺跡（市部）や比土遺跡（比土）、北門遺跡（大谷）などでは掘立柱建物で構成された集落跡が見つかっている。なかでも森脇遺跡は、規則的に配置された掘立柱建物や倉庫群が検出され、郡司層の居宅であった可能性が指摘されている。また、<sup>しもごおり</sup>下郡遺跡（下郡）では井戸から延暦の紀年銘と出挙にかかる記載、人名の記された木簡が出土している。なお、生産遺跡である窯跡もいくつか確認されている。御墓山窯跡（佐那具町）、備後坂窯跡（佐那具町）、奥山窯跡（市部）、引台窯跡（大野木）などである。なかでも、御墓山窯跡では飛鳥・奈良時代の各種須恵器が出土したほか、法隆寺玉虫厨子に似た宮殿形陶製品や陶棺が出土している。

### ③ 荘園の広がりとは伊賀国

奈良時代前半に王臣寺社による土地所有がはじまり、寺社や貴族による私的な土地所有は、やがて荘園制の展開へとつながってゆく。伊賀国は東大寺などの宮都官寺の木材の供給地としての役割を担い、奈良時代後半から貴族や有力寺社の荘園が展開した。なかでも著名なのが名張市域の東大寺領黒田荘である。ここは、戦後歴史学の起点となった石母田正『中世的世界の形成』の舞台となった荘園であるが、同時期に市域で展開したのが、北伊賀五ヶ荘と称される玉瀧・<sup>ともだ</sup>靱田・湯船・内保・榎山の各荘であった。五ヶ荘は、平安から鎌倉時代にかけて伊賀国衙と

相論を繰り返しながらも最終的に室町期までその命脈を保ってゆく。

一方、伊賀国中部から南部に展開したのが伊勢神宮領の神戸である。倭姫命が伊勢神宮へ鎮座する前に立ち寄ったことが由緒とされる穴穂宮（神戸神社下神戸）を中心とした伊賀神戸、伊賀国南部の阿保神田、名張郡の多良牟六箇山など神宮領が広く展開していた。

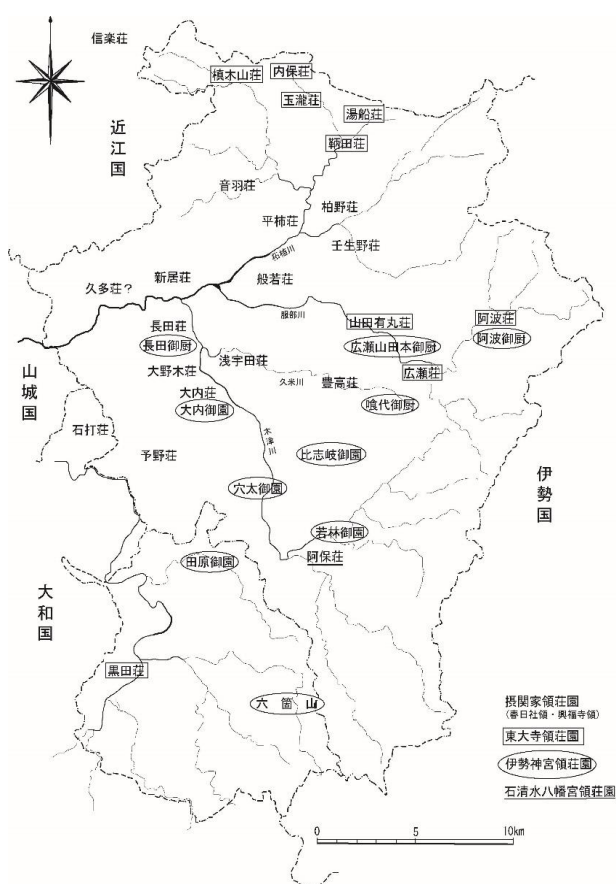


図 13 伊賀国の荘園

有力寺社や貴族の荘園が展開するなか、平安時代後期に伊賀国において在地領主として勢力を振るったのが藤原実遠である。実遠の父にあたる藤原清廉は、下級貴族ながらも伊賀・大和・山城に多くの所領を有し、租税を滞納する強欲の領主「猫恐ノ大夫」として『今昔物語集』に登場する。実遠の所領は、伊賀国全域に及んでいた。

平安時代末期、白河上皇と伊勢平氏の嫡流平正盛が結びついたことが平氏進出の契機となった。白河院の後継者となった鳥羽院と平忠盛のつながりが平氏繁栄の基盤を築くこととなり、保元・平治の乱（1156・1159）で平清盛が勝利したことを契機に平氏の政権が誕生した。平氏一門の躍進を支えたのが、平家貞とその子供たちであった。なかでも平家継は、山田郡平田に拠点を置いて平田家継と名乗り、治承・寿永の内乱（1180～1185）では伊賀・伊勢の武士団を率いて大規模な軍事行動を起こすことになった。

### 3-1-3 中世（鎌倉から織豊時代）

#### ① 源平の戦いと新大仏寺の創建

寿永3年（1184）1月、東国から平氏追討の軍を率いて上京する源義経は、加太峠から伊賀国に進軍した。柘植地区の「くらぶ山」「風の森」を経て、一宮（敢国神社・一之宮）<sup>あえくに</sup>を通過し、射手神社（長田）<sup>ながた</sup>において戦勝祈願を行ったという。

全国的な戦乱が落ち着くと、戦災で大きな被害を被った東大寺再建が着手されるが、莫大な費用がかかるため財源の確保が課題となった。そこで再建を担うことになった俊乗坊重源<sup>しゅんじょうぼうちゅうげん</sup>は、全国7カ所に「別所」と呼ばれる再建のための物と人の調達を担う布教拠点<sup>しゅんじょうぼうちゅうげん</sup>を設けた。伊賀国においては山田郡に「伊賀別所」が設定され、同郡の阿波・広瀬・山田有丸荘が東大寺領となった。伊賀別所の設定とともに建立された新大仏寺（富永）には、阿弥陀如来坐像（頭部のみ創建時）と獅子などが浮き彫りされた石造台座や俊乗上人坐像（いずれも重要文化財）が伝わる。

なお、伊賀地域では平安時代以降、仏像の数が増え、平安時代後期から鎌倉



風の森神社跡（柘植町）



新大仏寺（富永）阿弥陀如来坐像  
石造台座

時代にかけての経巻も確認されている。優品の仏像が市域に多く所在する背景には、東大寺領や摂関家領の展開との関わりが考えられる。ところが、鎌倉時代になると、西大寺や唐招提寺など南都律宗が広がりを見せ、このことは石造美術の有り様からもうかがうことができる。

## ② 悪党の活躍と地域社会の形成

鎌倉時代後期には、在地の武士たちは摂関家や寺社の荘園の現地管理を担う一方で、年貢未納や他の荘園への侵略を繰り返し、荘園領主の側から「悪党」と呼ばれる存在へと変化していった。伊賀の大悪党、服部入道持法に代表される在地の武士たちは、国衙や荘園領主とわたりあいながら、地域における実効支配を強化していった。

服部入道持法を中心とする悪党は、南北朝の内乱期においても活発な活動が続けた。室町幕府成立当初、伊賀国守護は仁木義長が補任されたが、守護仁木氏と悪党と呼ばれた在地領主、荘園領主である東大寺など、それぞれの勢力の抗争が繰り広げられた。

南北朝合一後の伊賀国は、一時期を除き仁木氏が守護に任じられた。しかし、伊賀国全体に守護権限が及ぶことはなく、影響力を行使し得たのは、市域北西部の新居・三田地区を中心とした地域にすぎなかった。この地域には、仁木氏館跡（三田）や上山氏館跡（東高倉）といった仁木氏関連の中世城館跡や、妙覚寺跡（東高倉）などの寺院跡が所在する。また、仁木氏が天正2年（1574）に本殿造営を行った高倉神社（西高倉）もある。守護の権限が及ぶ範囲を中心に、年号と「人」「馬」「米」などの文字、花押が刻まれた陶板「土符」が出土しており、伊賀地域北部特有の考古遺物として注目される。

この時期の伊賀国は、「壬生野惣荘」「服部郷」「種生郷」のように表記され、各地域において惣社を核として結びついた地侍たちによって地域運営が行われていた。種生神社（種生）や山畑勝手神社（山畑）に残る棟札は、地域の地侍や百姓たちが力を合わせて惣社を造営する姿を読み取ることができる。地域においては、



応永22年(1415)銘のある土符



今も集落に残る中世城館の土塁(川東)

土豪・地侍たちは村を主導するとともに、その身分指標として屋敷を堀と土塁で囲む中世城館を形成した。また、彼らは伊賀衆と呼ばれ、他国からの要請に答えて傭兵として出陣することもあった。こうした中から、忍者「伊賀者」が誕生していった。

また、中世末期には、織田信長の侵略に備えて 11 カ条の惣国一揆掟書を定めて対抗し、天正 7 年 (1579) に伊賀国に侵入した織田信雄を撃退するものの、天正 9 年 (1581) に織田信長の侵攻を受けて織豊政権下に組み込まれていくことになった。

天正 12 年 (1584)、豊臣秀吉より伊賀国の統治を任された脇坂安治は、国内各所に点在する城館の破却を命じた。翌年、豊臣秀吉の命により大和国から入国した筒井定次は、上野城を築き、平田・名張・阿保<sup>あお</sup>に支城を配置して伊賀国内を統治した。筒井氏は、村々の境界を定める「村切り」と検地を実施した。

### 3-1-4 近世（江戸時代）

#### ① 上野城下町と村々の成立

慶長 13 年 (1608)、徳川家康により伊賀・伊勢を与えられた藤堂高虎<sup>とうどうたかとら</sup>が入国した。藤堂高虎は慶長 16 年 (1611) に上野城の改修に着手し、城の北側にあった城下町を南側に配置し、東西に大手門を設けた。そしてその外側に 3 本の筋（本町・二之町・三之町）と通り（西之立町・中之立町・東之立町）で区画された町人地と鉄砲町や忍町などの中下級武家地、寺町を戦略的に配置した。この町割りは基本的に現在まで踏襲されており、藤堂氏による上野城と城下町の建設は、現在の中心市街地の礎となったのである。

また、高虎は、伊賀国内の大和・伊賀・初瀬の主要街道を整備し、街道には島ヶ原・佐那具・上柘植・平田・上阿波・阿保<sup>あお</sup>などの宿場を定め、藩が使用する施設「御茶屋」を整備した。これにより、上野城下を中心として伊賀国内の村々、他地域が有機的に結びつくようになった。

近世伊賀国は、阿拝 (69 カ村)・伊賀 (50 カ村)・山田 (25 カ村)・



上野城下町絵図



名張（38 カ村）の 4 郡に 182 カ所の近世村があった。藩政下では村や町が基礎単位となり統治が行われた。村方においては、市域で 8 名の大庄屋（宝永以前は 10 名）のもと、各村の庄屋・年寄、五人頭が村政を担った。また、町方では 2 名の町年寄（幕末は 3 名）のもと、各町の町肝煎、五人頭が担った。なお、町方においては、町年寄と町肝煎の間に、三筋町に定肝



島ヶ原宿本陣・御茶屋の岩佐家  
（島ヶ原）

煎、枝町に惣肝煎が置かれた。村や町に法による統治が定着したのは 3 代藩主高久<sup>たかひさ</sup>の時代、寛文年間（1661～1673）であった。高久は、元禄 2 年（1689）に村方に対し十七カ条、町方に対し二十一カ条の触書を出し領民の規範とした。

村では年貢である米の生産が中心であったが、マツタケの採取やアユ漁、木綿の生産、北部における伊賀焼の生産、町方の粕や酒の生産も地域経済を支えた。こうした地域の経済や社会を支えたのが、さまざまな立場の人々による多様な生業であり、被差別民による雪駄や革製品もそれらの一つであった。また、多様な手工業製品の生産とともに、新たな流通経路の確保も試みられた。上野城下からほど近い小田村から山城国笠置までの木津川（長田川）<sup>ながた</sup>舟運の開削が京都の豪商角倉家により行われ、文化 12 年（1815）に開通した。

上野城と津城の 2 カ所の本拠を有する藤堂藩は伊賀付、津付の藩士<sup>うねめ</sup>に分けられ、それぞれ統治を行った。伊賀付の藩士は、城代職の藤堂采女家はじめ新七郎<sup>げん ぱ</sup>や玄蕃、式部など藤堂家一門の大身の藩士の「組」に所属する一方で、加判奉行、普請奉行などの役職に任じられた。伊賀城代を頂点とした法に基づく統治のありようは、『宗国史』<sup>そうこくし</sup>や『序事類編』<sup>ちようじるいへん</sup>といった記録により今もうかがい知ることができる。

藤堂藩の職制で特徴的なのが、藩主から禄を与えられない在村の郷士「無足人」の存在である。平素は村の中核的存在として在村したが、幕末の戊辰戦争では従軍し、藤堂藩の軍事力の一端を担った。また、無足人と同じ階層に属するのが伊賀者である。江戸時代を通じて 12 家が担い、在村しながらも平素は上野城の警備、有事には探索などの情報収集を担い、幕末には、山崎戦争における前線や来航した外国船を探索するなどの活躍を見せた。

## ② 俳聖松尾芭蕉<sup>まつお ばしょう</sup>と近世伊賀の文化

俳聖松尾芭蕉を輩出した伊賀では、城下町を中心にさまざまな文化が開花した。芭蕉翁は、藤堂新七郎家の家臣であったが、同家では嗣子<sup>せんぎん</sup>の良忠（蟬吟）



が中心となって浜市右衛門（式之）や高畑治左衛門（市隠）ら家臣が俳諧サロンを形成し、やがて俳諧は、伊賀蕉門の中核を担う窪田惣七郎（猿雖）らの商家俳人へも広がっていった。

また、大北珉堂や池田雲樵らによる南画も城下町を中心に広がりを見せた。さらに、町方の菊岡如幻による『伊水溫故』、伊賀城代職にあった藤堂元甫による『三国地志』など、地域の様子が記録されるようになり、地誌として当時の様子を今に伝えている。

藩祖高虎以来、武勇をもって知られる藤堂藩は、学問や教養を尊ぶ藩でもあった。10代藩主高兌は、文政4年（1821）に藩士の子弟の教育機関である藩校崇広堂を建設した。やがて、藩校で学んだ藩士たちは、明治を支える人材として成長する。

文芸・芸術とともに、今につながる華やかな祭礼が成立したのも江戸時代であった。万治3年（1660）に再興された上野天神祭は、宝暦年間（1751～1764）にダンジリ中心の祭礼になり、概ね文化・文政期以降には現在のかたちになったと考えられている。平田宿の植木神社においても、文化年間（1804～1818）にはダンジリを中心とした祭礼が行われるようになっていた。



藩校 崇広堂（上野丸之内）

また、江戸時代中期以降、疫病退散の祇園祭りや雨乞祈願と結びついた「かんこ踊り」が行われるようになった。

### ③ 幕末の動乱と安政伊賀上野地震

慶応3年（1867）、将軍徳川慶喜は大政奉還を行い、260年余り続いた江戸幕府は終焉を迎えた。慶応4年（1868）、会津・桑名藩兵を中心とする旧幕府軍と薩摩・長州軍が京都南方の鳥羽・伏見で衝突し、戊辰戦争が勃発した。薩摩・長州軍が錦の御旗を得、新政府軍に味方するよう勅命が下ったことを受けて、藤堂藩は薩摩・長州の新政府軍として参戦し、同軍を勝利に導いた。

藤堂藩はその後も戊辰戦争に従軍し、東北・北海道を転戦した。藤堂藩兵の中核をなしたのは無足人であったが、維新後、士族として認められなかった無足人は、復族・復禄請願運動を展開することとなった。

明治2年（1869）6月、版籍奉還が行われ、藩主は藩知事に任命された。伊賀地域（伊賀市・名張市）は安濃津藩に含まれることになった。明治4年（1871）7月、廃藩置県が実施され、安濃津藩から安濃津県になり、藩知事にかわって、

地方官として県知事が中央政府から派遣され、藤堂家による伊賀の統治は終わりを告げた。

なお、幕末期の嘉永 7 年（1854） 6 月、伊賀北部の木津川断層を震源とする大地震が発生した。この地震は、新居・三田地区を中心に甚大な被害をもたらし、上野城と城下町も大きな被害を受けた。翌安政 2 年（1855）、服部川河畔に地震による死者を供養する法華経塔が建立された。



法華経塔(服部町)

### 3-1-5 近代（明治から昭和前期）

#### ① 近代行政制度の成立

明治 4 年（1871）の廃藩置県実施後、地方行政制度の枠組みを巡ってはしばらく混乱が続いた。明治 5 年（1872）5 月の大区小区制や明治 11 年（1878）の連合町村制などの変遷を経て、明治 21 年（1888）、近世村を基礎に 300 から 500 戸規模を基準とする市制・町村制が公布された。

伊賀地域（伊賀市・名張市）においては明治 22 年（1889）4 月の施行により、2 町 38 村が誕生した。また、伊賀国の 4 郡（阿拝・山田・伊賀・名張）は、明治 30 年（1897）に県の郡分合方針により阿拝・山田郡は阿山郡、伊賀・名張郡は名賀郡となった。阿山郡と名賀郡、2 町 38 村の体制は、阿保町が大正 9 年（1920）に町制を施行したことにより 3 町 37 村となったが、この体制は昭和 16 年（1941）の上野市成立まで続いた。

町村では、町村長・助役・収入役・書記が置かれ、徴税や戸籍の管理、兵事に関する事務が行われた。同時に議会も設置され、制限選挙制度ながら議員は選挙により選ばれた。

行政制度の整備とともに警察制度も整えられた。明治初期の上野警察署は旧東大手門に置かれていたが、明治 21 年（1888）にほぼ同じ位置に擬洋風の二階建の庁舎が新築された。上野警察署は、当初は阿拝・山田・伊賀郡を管轄したが、のちに上野警察署が阿山



図 14 市域の旧町村と現在の地域区分

郡、名張警察署が名賀郡を管轄するようになった。

明治5年（1872）に学制が發布され近代教育制度が始まった。当初は行政区画と同じように、全国を8大学区に分け、1大学区に32中学区、1中学区に210小学区を設置することとしたが、明治12年（1879）に連合町村を設置主体とするよう改めた。このころ、全国的に擬洋風校舎が建築されたが、市域においても明治14年（1881）に小田村の啓迪学校、平田村の平田学校、翌年に上野市街地の東部学校で擬洋風校舎が建設された。明治22年（1889）に施行された市制・町村制以後は、市町村に尋常小学校の設置が義務付けられるようになり、これにより近代の各行政村に尋常小学校が置かれるようになった。明治40年（1907）には、それまで4年制であった尋常小学校が6年制になり、高等科の修業年限が2年となった。各村の尋常高等小学校は、昭和16年（1941）に国民学校となり終戦まで続いた。

一方、中等教育機関である中学校・女学校も設置された。地域の要望を受けて上野町に設置された三重県第三中学校は、明治32年（1899）に開校し、翌年に地元有志の支援を受けた校舎が完成した。

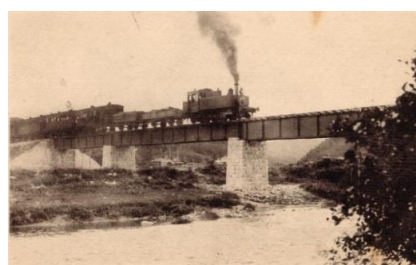
第三中学校は、大正8年（1919）に上野中学と改称し、地域の人材を育成する役割を果たした。女学校については、明治44年（1911）に設置された伊賀実科高等女学校が大正7年（1918）に阿山郡立高等女学校となり、大正11年（1922）の県立移管とともに阿山高等女学校となった。



阿山高等女学校校舎新築落成式

## ② 近代の交通と産業

市域の近代化の象徴の一つが鉄道の敷設であった。明治23年（1890）2月、関西鉄道の三雲―柘植間が開業し、柘植駅は三重県初の鉄道駅として栄えた。関西鉄道は草津―四日市間が完成すると柘植―加茂間の工事に着手し、明治30年（1897）1月に柘植―上野間、同年11月に上野―加茂間が開業した。



木津川を渡る伊賀鉄道蒸気機関車

関西鉄道の開通により、市域の産品である米や木材、陶土、薪炭などが移出され、肥料などが移入された。なお、関西鉄道は明治40年（1907）に国有化された。

市域の南北を結ぶ路線については、明治 20 年代後半から計画されていたが、具体性をもった計画が出されたのは大正時代に入ってからであった。大正 3 年（1914）に伊賀軌道株式会社が設立され、上野町の事業家らを中心に資金を集め、大正 5 年（1916）に上野駅連絡所（現伊賀上野駅）から上野町駅（現上野市駅）に至る 2.3km が開業した。さらに大正 11 年（1922）には、上野町駅から名張駅（後の西名張駅）までの区間が開通した。また、市域南部を東西に横断する路線については、大阪電気軌道（大軌）が昭和 2 年（1927）に参宮急行電鉄を設立し、桜井以東の区間を昭和 4 年（1929）以降順次建設した。昭和 5 年（1930）10 月に榛原—伊賀神戸間、翌月に伊賀神戸—阿保間、12 月には難所であった青山トンネルが開通した。

江戸時代より生産力が高く、米どころであった市域は、近代に入っても農業が産業の中心であった。伊賀産の米は、明治 20 年代までは品質と規格の統一性に課題を抱えていたが、生産者による取り組みの結果、明治 45 年（1912）には、東京深川市場において全国で最も高価な米となり、大正 7 年（1918）には宮内省に納められるまでの評価を得るようになった。

茶や菜種など江戸時代以来の作物に代わって奨励されたのが養蚕であった。明治 20 年代から生産農家は一貫して増えつづけ、昭和 4 年（1929）10 月に始まる世界恐慌まで、市域の農村経済を支えた。また、四方を山に囲まれた市域は、明治 30 年代後半の部落有林統一事業を契機に植林事業が本格化し、昭和初期には材木のほか薪炭の生産も盛んになり山間部の主要産業となった。

工業については、明治 20 年代から養蚕の拡大とともに展開した製糸業がある。多くは農村工業の色合いの濃いものであったが、なかには上野町に工場を設け 80 人の職工を雇用する東海製糸株式会社のようなものもあった。同じく酒造も明治 20 年代から拡大し、明治末年までは主要産業の一つであった。江戸時代後期には生産が始まっていた和傘は、明治 30 年代から生産が拡大し、戦後間もない時期まで上野の主要産品の一つとなった。なお、丸柱村を中心に展開した窯業は、大正期には電動ロクロの導入と石膏型による成形で生産量が増加した。そうした中、阿山郡でも陶土を有効活用すべく郡会議員や町村長らが発起人となって阿山郡伊賀窯業株式会社が設立された。

明治から昭和初期にかけて市域の近代化に大きな役割を果たしたのが事業家田中善助であった。明治 15 年（1882）の大和街道道路改良社の設立を皮切りに、銀行・鉄道・窯業のほか、昭和初期には町長として上野町の下水道事業に取り組んだ。田中の名を全国に知らしめたのが新居村の巖倉水力発電所の建設



をはじめとする水力発電事業であった。明治37年(1904)、2カ年を費やして完成した<sup>いわくら</sup>巖倉水力発電所は、県初の発電所として上野町に電力を供給した。田中はその後も名張市の青蓮寺川、比奈知川に発電所を完成させた。

### ③ 芸術文化の興隆

交通機関が整備され近代の産業が発達するとともに、上野町を中心に文化芸術も発展した。明治期から新聞や文芸誌が発刊され、美術活動や郷土史の研究が行われるようになった。変わりゆく地域のなかで歴史や文化を大切にしようとする動きの中から、昭和10年(1935)には伊賀文化産業城(上野丸之内)が建設され昭和13年(1938)には蓑虫庵(上野<sup>にしひなたち</sup>西日南町)や鍵屋の辻(小田町)が県の史跡指定を受けた。さらには、昭和17年(1942)に俳聖殿(上野丸之内)が完成し、芭蕉翁生誕三百年を記念して全国俳句大会が開催された。

近代、市域において文化や芸術が興隆する一方で、大正期になると吉野作造による「民本主義」の広がりとともに市域でも社会運動が展開した。その代表ともいえるのが、大正11年(1922)の伊賀水平社の創設である。また、第1次大戦期の物価高騰と戦後恐慌は、農村部における小作争議を引き起こした。

### ④ 戦争と伊賀

明治6年(1873)に徴兵制が施行されて以来、市域の人々は西南戦争、明治27年(1894)の日清戦争、明治37年(1904)に開戦した日露戦争に従軍し、戦地でたおれる者も少なくない。近代日本の対外戦争における戦病死者を弔うため、日露戦後各村に忠魂碑が建設された。昭和12年(1937)の盧溝橋事件を契機に勃発した日中戦争、続く太平洋戦争では、アジア・太平洋の全域にわたって従軍し、市域出身の戦病死者は2,700人余りを数えた。また、人々は戦時には日用品や食料が配給制になるなど、生活は厳しい統制下に置かれ、戦争末期には、銃弾とするための金属回収や食料増産、軍需産業への動員などに追わ



巖倉水力発電所の水路跡(西山)



伊賀日報 大正15年1月16日付



出征兵士を見送る人びと



れ、生活は困窮を極めた。

終戦間際の昭和 20 年（1945）4 月には、西明寺に海軍航空隊の飛行場が建設され、その司令部は上野城跡に設置された。またこの頃、国鉄（現 J R）関西本線沿線には燃料や弾薬など軍需物資備蓄用の壕が掘られた。さらに、東之立町（現銀座通）では、空襲被害を最小限に留めるため道路幅を拡張し、東側は立ち退きを余儀なくされた。

昭和 20 年（1945）8 月に戦争が終結し、GHQ による戦後改革が行われ、市域も大きな変革を迎えることになった。戦後改革では市町村長が公選制になり、地主制を否定して農地解放が実施され、民主主義的な教育を基本とする教育改革が行われた。教育改革では、国民学校から市町村立の小学校となり、新制中学校が設置された。

### 3-1-6 現代（昭和中期から平成時代）

#### ① 高度経済成長から現在の伊賀

昭和 24 年（1949）、GHQ の要請で結成されたシャープ使節団による日本の税制に対する勧告（シャープ勧告）により、地方自治体の財政力が脆弱であることが指摘され、行政の合理化と地方財政の強化を目指して、昭和の大合併が進むこととなった。伊賀地域（伊賀市・名張市）では、すでに昭和 16 年（1941）に上



名阪国道の開通

野町と周辺 6 カ村が合併し、上野市が成立していたが、昭和 25 年（1950）から昭和 34 年（1959）にかけて明治 22 年（1889）4 月に成立した 2 町 38 村は 2 市（上野市・名張市）3 町（伊賀町・阿山町・青山町）2 村（島ヶ原村・大山田村）となった。この枠組みが平成 16 年（2004）11 月の伊賀市発足まで続いた。

経済白書に「もはや戦後ではない」との文言が記された昭和 31 年（1956）以降、日本は高度経済成長期に突入した。四周を山に囲まれ他地域と隔絶された地理的環境にあった市域は、昭和 37 年（1962）に低開発地域工業開発区域に位置づけられて、積極的な工場誘致が展開された。上野市街地においては、昭和 33 年（1958）に上野市駅前の上野市産業会館が落成し、昭和 35 年（1960）から昭和 41 年（1966）にかけて、建築家坂倉準三による設計のもと、上野市公民

館をはじめ、上野市庁舎・上野市西小学校体育館などの公共施設が相次いで建設された。

昭和 40 年（1965）に完成した名阪国道は、市域と他地域を結ぶ交通事情を劇的に改善させた。市域が「二全総」（新全国総合開発計画）の開発地域に位置づけられたことにより、工場進出が促進された。

また、1960 年代から住宅団地の造成が行われるようになった。しかし、高度経済成長の終焉と重なり、空地のまま放置されるところもあった。1980 年代以降に造成された宅地は入居者が増加し、独立した行政区（町）となるところも現れた。また、都市近郊に位置する市域には、1970 年代以降、各所にゴルフ場が造られるようになった。

一方、人々の生活の周辺では、水道が普及し、自動車の普及とともに道路整備が進められ、舗装された道路が普及した。農村地域においては 1970 年代後半から農業地域基盤整備事業により水田が区画され、集落では 1990 年代半ばから農業集落排水事業により下水道が整備された。

21 世紀に入ると、中心市街地の空洞化、農村部においては人口減少が顕著にみられるようになった。地方自治体においても効率化が求められ、合併が促進された。平成 16 年（2004）11 月に 1 市 3 町 2 村が合併し、伊賀市が誕生した。

12 月に伊賀市における自治の基本的な事項を定めた自治基本条例を施行し、平成 18 年（2006）に伊賀市総合計画（輝きプラン）が策定されて合併後の市の取り組むべき施策がまとめられて以降、地域福祉や人権、交通といった個別の計画策定が進められ、市政の諸課題に対する取り組みが具体化されていった。

地域においては、各地区市民センターが開設されるとともに住民自治協議会が発足した。

平成 20 年代を通じて、想定される大規模災害に備えた計画や相互協定の締結などを進めたほか、農村部における課題である耕作放棄地や鳥獣害への対策、中心市街地における課題解決に向けた中心市街地活性化基本計画の策定とハイトピア伊賀の建設など、さまざまな取り組みを進めてきた。

平成 31 年（2019）に発生した新型コロナウイルスは、人びとの行動が制限されて、地域の祭礼行事の縮小や観光客の激減など、社会・経済などあらゆる活動に大きな影響を及ぼした。

### 3-2 関わりある人物

#### ① しゅんじょうぼうちやうげん 俊乗坊重源 (保安2年(1121)～建永元年(1206))

重源は、治承4年(1180)の平重衡の南都焼き討ちで焼失した東大寺の再建に当たり、養和元年(1181)、造東大寺勸進職に任ぜられ、周防が東大寺の造営料国となると同国の国司に任じられた。諸

国を巡って勸進につとめ文治元年(1185)大仏開眼供養を行うに至った。平家滅亡後、没官領となった山田有丸荘、広瀬荘、阿波荘が東大寺領となり、建仁2年(1202)に源頼朝の支援を受け、阿波(富永)に新大仏寺(伊賀別所)を建立した。像高293cmの木造如来坐像は快慶作の国の重要文化財である。



木造俊乗上人坐像

#### ② とうどうたかとら 藤堂高虎 (弘治2年(1556)～寛永7年(1630))

藤堂家は、祖先が近江国犬上郡長野郷藤堂村に居住していたため、藤堂の姓を名乗った。浅井長政、織田信澄、羽柴秀長・秀保、豊臣秀吉に仕え、各地を転戦した。関ヶ原の戦いで東軍に属し、伊予20万石を領有。慶長13年(1608)伊勢・伊賀22万900石に封じられ、後に大坂冬の陣・夏の陣でも功績を挙げ32万3000石まで加増され、藤堂藩初代藩主となった。築城の名手といわれ、上野城をはじめ大坂城、今治城などを築城した。筒井定次の後に上野城に入り、現在の上野城下町を建設した。筒井天守の西に5層の天守の建設に取り掛かったが、完成間際に暴風雨により倒壊して天守のない城郭となった。筒井本丸跡地に城代屋敷を設け執政を行った。上野城の高石垣は高さ十五間(約30m)といわれ、大坂城と同等の全国有数の高さを誇る。



絹本著色藤堂高虎像

#### ③ つついさだつぐ 筒井定次 (永禄5年(1562)～慶長20年(1615))

大和郡山城主筒井順慶の甥に当たる。天正13年(1585)に豊臣秀吉により伊賀国に封じられ羽柴の姓を与えられた。それまで平楽寺のあった丘陵に上野城を築城し3層の天守を建て、北側に城下町を建設した。また、茶道の



筒井定次花押

隆盛により伊賀焼をはじめたため、「筒井伊賀」として後世に珍重された。定次治世に検地が行われるなどの施策が行われたが、慶長 13 年（1608）改易となった。

#### ④ <sup>まつお ぼしょう</sup>松尾芭蕉（寛永 21 年（1644）～元禄 7 年（1694））

伊賀市民は、松尾芭蕉のことを「芭蕉さん」と呼んでいる。伊賀市の小・中学校では俳聖芭蕉を顕彰すべく、夏休みの宿題で俳句を作ること指導しており、このことは全国でも珍しい取り組みである。



更科紀行 芭蕉自筆稿本

芭蕉は、寛永 21 年（1644）に現伊賀市で生まれた。上野赤坂町に芭蕉翁生家（市史跡）があるが、柘植町生まれとの説もある。

芭蕉は幼名を金作。父は松尾<sup>よ</sup>與左衛門。平忠盛・清盛の郎党で伊勢平氏の流れを汲む平家貞の甥、平宗清<sup>むねきよ</sup>を祖先に持つと言われている。平宗清は平治の乱後、敗走した源頼朝を近江国で捕縛した。芭蕉の母は伊予国の人ともいわれている。芭蕉の青年期は松尾忠左衛門宗房と名乗り、藤堂高虎の従兄弟良勝を祖とする藤堂新七郎家に仕え、俳諧を嗜んだ。芭蕉は俳諧の道を志し寛文 12 年（1672）頃、伊賀上野を離れ江戸へ向かう。江戸で経済的な支援者のもと多くの知識人・俳諧人と交流し俳諧を深め、江戸に芭蕉ありと名を成す。天和 3 年（1683）母死去の報を受け、翌年郷里伊賀へ旅立った。この紀行文が『野ざらし紀行』である。

その後も貞享 4 年（1687）から『<sup>おい</sup>笈の<sup>こぶみ</sup>小文』『<sup>さらしな</sup>更科紀行』の旅を続け、元禄 2 年（1689）、奥州へ旅立つ。有名な『奥の細道』の旅であった。元禄 7 年（1694）10 月 12 日、大坂南御堂の花屋仁右衛門屋敷で 51 歳の生涯を閉じた。伊賀市（当時、上野市）では昭和 22 年（1947）から命日に芭蕉祭を開催し、芭蕉の遺徳<sup>しの</sup>を偲んで、全国や海外から応募のあった俳句や研究著作などを披露し顕彰している。

#### ⑤ 田中善助（安政 5 年（1858）～昭和 21 年（1946））

安政 5 年（1858）、上野城下相生町に生まれる。幼名を竹内寛次郎という。15 歳で新町の叔父田中善助の養子となり、養父死後、養父の名前を襲名し、家督をついで金物屋「金善」を営む傍ら、実業家としての道を歩む。その功績の主



なものは、明治 16 年 (1883) に大和街道の道路改良工事を竣工。翌年上野商工会 (現上野商工会議所) を設立し、幹事に就任。明治 29 年 (1896) に伊賀貯蓄銀行 (のち伊賀上野銀行から百五銀行) を設立し、副頭取となる。明治 32 年 (1899) に上野町野<sup>の</sup>畠<sup>ばたけ</sup> (現緑ヶ丘地区) を開墾して宅地造成し、明治 37 年 (1904) に 48 歳で巖倉<sup>いわくら</sup>水力発電所を竣工し社長就任。大正元年 (1912) から大正 5 年 (1916) まで伊賀軌道 (現伊賀鉄道) の敷設に尽力し、開通させて取締役<sup>とくさつやく</sup>に就任した。



田中善助

また、伊賀の特産品である伊賀傘同業組合を設立し組合長に就任。下水道整備のため大正 13 年 (1924) に上野町町長に就任した。なお、これらのほかに、昭和元年 (1926) に伊賀鉄道延長全線電化事業や翌年に上野町下水道工事を行った。

また、明治維新以後、廃城となった上野城跡において、大正 3 年 (1914) に、公園委員として荒廃の一途をたどる上野城跡が町民の憩いの場となるよう城山の自然を保全しながら公園整備を行なうよう具体案を提示し、大正 13 年 (1924) 4 月からは上野町長として公園整備を前進させた。昭和 3 年 (1928) には、御大典記念として万歳館や愛閑亭を建設。平成 2 年 (1990) 万歳館が焼失した後、現在、愛閑亭のみが残されている。また、上野公園だけでなく、同時期に西の御旅所近くに鍵屋の辻公園を整備、仇討所縁の数馬茶屋や武徳殿を建設している。なお、善助は、事業の傍ら書画陶芸にも才能を発揮し、雅号を「鉄城」と名乗り市民から「鉄城翁」と称されている。

#### ⑥ 川崎 克 (明治 13 年 (1880) ~昭和 24 年 (1949))

明治 13 年 (1880) 上野町車坂町に生まれる。明治 34 年 (1901) に日本法律学校 (日本大学前身) を卒業し、その年に尾崎行雄 (号峇堂) の秘書となった。大正 4 年 (1915) に三重県から衆議院議員に初当選、以降当選 10 回、従四位勲二等に叙される。川崎は、雅号を克<sup>こく</sup>堂<sup>どう</sup>と称し、書・画・陶芸にも秀で、優れた作品を数多く残し、『伊賀及信楽』・『芭蕉は生てる』などの優れた著書も残した。生涯を通じて、史跡の保存、自然保護に熱烈な至情を傾け、昭和 10 年 (1935) に「伊賀文化産業城」と称する上野城天



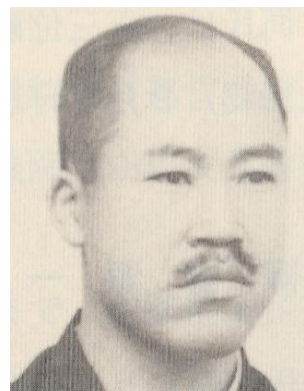
川崎 克



守閣を復興し、昭和 17 年（1942）に松尾芭蕉を顕彰する施設として「俳聖殿」を私費により建設した。

⑦ 橋本 策（明治 14 年（1881）～昭和 9 年（1934））

明治 14 年（1881）、旧阿拝郡御代村<sup>みだい</sup>の医者<sup>はしもと</sup>の家に生まれ、三重県尋常中学校（現三重県立津高等学校）、第三高等学校（現京都大学）を経て、京都帝国大学福岡医科大学医学科に入学した。卒業後は医学部第一外科で研究を続け、大正元年（1912）、特異な甲状腺腫を発見しドイツの外科雑誌に「甲状腺のリンパ節腫症的变化に関する研究報告」を発表した。後に英米研究者から注目評価され、アメリカ医学書には「橋本病」と明記された。その後、橋本病は代表的な自己免疫疾患と位置づけられる重要疾患となった。第一次世界大戦により帰国を余儀なくされ、大正 5 年（1916）4 月、34 歳で故郷に戻り 5 代目橋本病院院長となって地域医療に貢献した。



橋本策

⑧ 横光利一（明治 31 年（1898）～昭和 22 年（1947））

明治 31 年（1898）、福島県北会津郡で父梅次郎、母こぎくの長男として生まれる。父が鉄道敷設の測量技師だった関係で、朝鮮半島に渡った間、母の故郷阿山郡東柘植村（現伊賀市柘植町）で幼少期を過ごした。明治 44 年（1911）、三重県第三中学校（現三重県立上野高等学校）に進み上野町万町で下宿生活を送る。このときの初恋の思い出を『雪解<sup>ゆきげ</sup>』という小説で発表している。大正 5 年（1916）に早稲田大学英文科に入学するが文芸活動に没頭し中退、志賀直哉の影響を受け始める。大学に復学するも菊池寛に師事し、川端康成を紹介されて生涯の友と誓う。大正 12 年（1923）、文芸春秋社の同人となり本格的に執筆活動を行い、プロレタリア文学全盛の時代に川端らとともに「新感覚派」として注目を集め、文学の神様として一世を風靡した。代表作品に『日輪』『機械』『旅愁』などがあり、地元柘植地区では文学碑を立て、平成 11 年（1999）から毎年「雪解の集い」を開催し、利一が幼少の頃居住した場所に「跳ね釣瓶の庭<sup>は</sup>」が再現されている。



横光利一

## 4 文化財等の分布状況

三重県西部に位置する本市は、古来より滋賀県南部や京都府南部、奈良県北東部との結びつきが強く、文化財にもその影響をうかがうことができる。また、大きな戦災を被ることなく現在に至っていること、大規模な開発が市全域に及んでいないことにより農村景観が良好に残されている一方で、中心市街地では近世から現代にいたる文化財が重層的に残存し、歴史の重みを感じる景観を形成している。

本市には、三重県内最多の 500 件を超える指定等文化財が所在し、有形文化財では、県内最古級で中世にさかのぼる春日神社拝殿や観<sup>かん</sup>菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>寺<sup>じ</sup>本堂・楼門をはじめ、近世の寺社建築や武家住宅、近代の擬洋風建築など様々な建造物があ

表 6 伊賀市内の指定等文化財件数一覧表

(2025. 4. 1 現在)

種 別			区 分	国			県	市		計
				指定等	登録	選択		指定	登録	
有形文化財	建造物			8	55	—	13	44	—	120
	美術 工芸品	絵 画		2	0	—	10	14	—	26
		彫 刻		18	0	—	33	56	—	107
		工芸品		0	0	—	11	28	—	39
		書跡・典籍・古文書		2	0	—	11	41	—	54
		考古資料		1	0	—	6	18	—	25
		歴史資料		0	0	—	2	14	—	16
無形文化財	演 劇			0	0	0	0	0	—	0
	音 楽			0	0	0	0	0	—	0
	工芸技術			0	0	0	0	0	—	0
民俗文化財	有形の民俗文化財			0	0	—	3	14	—	17
	無形の民俗文化財			2	0	1	7	8	—	18
記念物	遺 跡※			8	0	—	13	31	2	54
	名勝地			(1)	0	—	(1)	0	—	(2)
	動物、植物、地質鉱物※			3	0	—	6	24	—	33
文化的景観				0	—	—	—	—	—	0
伝統的建造物群				0	—	—	—	—	—	0
総 計				44	55	1	115	289	2	509

※遺跡は、国指定 8 件のうち 1 件は「名勝及び史跡」、県指定 13 件のうち 1 件は「史跡及び名勝」である。※名勝地は、名勝及び史跡、史跡及び名勝と重複。

※動物、植物、地質鉱物 3 件は、「地域を定めず」の 1 件を含む。

る。彫刻では、平安後期の木造彫刻や鎌倉期の石造彫刻が多く残されているのが特徴で、本市の国・県指定文化財の木造彫刻の件数は、県内件数の約3割を占めている。書跡・典籍・古文書では、経典類のほか芭蕉翁関係の遺墨があるのが特徴といえる。民俗文化財では2件の国の重要無形民俗文化財に代表されるように、現在でも多くの行事や祭礼が継承されている。記念物では、前方後円墳や古代寺院や中世寺院、城館跡など、県下最多の国・県指定文化財が所在する。

#### 4-1 国指定等文化財

##### ① 重要文化財（建造物）

【**観菩提寺本堂・楼門（島ヶ原）**】 桁行三間、梁間三間の入母屋造の檜皮葺で、外部は総朱塗、正面の三間向拝は明治16年（1883）に付加された。柱はすべて円柱で、腰には四方に濡縁をめぐらし、堂前面の各間に蔀格子を設けている。内部は前方一間通りを外陣、後方二間通りを内陣とし、内外陣ともに棹縁天井としている。また、堂中央に四本柱を組み、柱上部に天井長押をめぐらし、内部を高めて格天井にしている。中世後期の伽藍図とされる「観菩提寺古絵図」（市指定有形文化財）には、本堂・楼門のほか多数の堂宇が描かれていることから、伽藍の多くが天正伊賀の乱で被災したのに対し、本堂は被災を免れたと考えられる。

楼門は、入母屋造の檜皮葺、屋根の勾配は緩やかで軒端に著しい反りがあるて荘重な造りになっている。上層三間二面の柱間は各面各間を開け放ち、腰に厚い廻縁をめぐらして高欄を設けている。下層三間二面の中央間を入口とし、両脇間を開け放ち、外側左右に金剛力士像（市指定有形文化財）、内側左右に広目天立像・多聞天立像（県指定有形文化財）を安置している。内側には鏡天井、両側面各二間は壁を塗っている。室町期楼門建築の優作とされ、建築手法に和様と唐様が混在している。



観菩提寺本堂・楼門

【**高倉神社本殿、境内社の八幡社本殿、春日社本殿（西高倉）**】 本社本殿は、一間社流造の棟のみ瓦葺の檜皮葺で並立する3殿の中央に立ち、斜面を這い上がる捻廊（ねんろう）を設けている。八幡社本殿も本社本殿と同様に一間社流造の棟のみ瓦

葺の檜皮葺である。春日社本殿は一間社、隅木入春日造の檜皮葺である。3棟とも三方に擬宝珠<sup>ぎぼし</sup>の付く高欄の浜縁をめぐらす。虹梁<sup>こうりょう</sup>や身舎柱上組物には極彩色が施され、臺股<sup>かえるまた</sup>の彫刻手法などに桃山期の特色がよく表れている。天正2年（1574）の棟札に「奉造立春日社仁木殿長政為御本願造立」とあり、建築様式の時期的な特徴と合致する。この棟札のほか、寛文元年（1661）・元禄2年（1689）・宝永元年（1704）・享保13年（1728）・文化14年（1817）の棟札が残されている。



高倉神社本殿・八幡社本殿

【猪田神社本殿（猪田）】 一間社流造の檜皮葺で、棟のみ瓦葺が見られ、三方に擬宝珠高欄を付した浜縁がめぐらされている。正面の柱間には板唐戸、他の3面は板壁で、虹梁・身舎柱上組物には極彩色が施されている。棟札によると大永7年（1527）に再建され、天正18年（1590）に大修理が施されたことがわかり、建物の構造に室町末期の形式が残存している。



猪田神社本殿

棟札は大永7年（1527）のほか、寛永5年（1628）・延宝8年（1680）・延享4年（1747）・天明7年（1787）・慶応元年（1865）のものが残されている。

【大村神社宝殿（阿保）】 明治23年（1890）に現在の本殿を建築する際、主殿であった鹿島社を西方に移して保存したものである。一間社入母屋造の妻入で浜縁が付く。屋根は檜皮葺である。正面の柱間は板唐戸、他の3面は板壁で、臺股は向拝に竜、正面に牡丹・唐獅子、他は紅葉に鹿が彫られ、身舎柱上組物や虹梁には優雅な彩色が施されている。天正伊賀の乱によって焼失したが、天正15年（1587）に再建されて華麗な桃山様式の建築美が後世に残された。正保4年（1647）・元禄11年（1698）・安永8年（1779）の銘がある棟札が残されている。



大村神社宝殿



【町井家住宅 主屋・書院（<sup>ひじきがわ</sup> 栢川）】 町井家は江戸期の大庄屋で、住宅は主屋と書院からなる。建築年代は主屋が18世紀後半、書院が19世紀に下るとされる。主屋は入母屋造の棧瓦葺一重の建物で、前面に本瓦葺の庇が付いている。東側は土間で上部は二重梁式の和小屋、小屋束や貫を細かく組み合わせて高い棟を支えている。西側には畳間が並び、上手中央に仏壇が据えられている。書院は主屋の西南隅につながり、主屋に比べると繊麗で入母屋破風が巧みに組み合わせられている。



町井家住宅

## ② 重要文化財（美術工芸品（絵画））

【絹本着色<sup>とうどうたかとら</sup>藤堂高虎像（<sup>なが た</sup> 長田 西蓮寺）】 中央下に衣冠束帯の端座した藤堂高虎の肖像が描かれている。白髪に黒の冠をつけ、纓は長く垂れている。顔は白髯老顔、衣は黒色で浅葱色の指貫をはき、右手に笏、左腰には太刀を帯びている。背景は金彩、麻葉つなぎの中に丸に五枚葛文が施された幕が絞られ、その間に山水が描かれている。絵の上部に「権大僧都高山（中略）三国伝灯大僧正天海」の賛辞があり、装裏には「奉表補高山道賢之像俗名藤堂和泉守高虎公 時寛文十一辛亥歳（1671）八月時正 伊州阿閑郡長田庄医王山西蓮寺常住 真雅修之」と墨書がある。寺伝によれば、絵は藤堂藩の画師曾谷宗浄の筆で、真雅は西蓮寺16世とされる。



絹本着色藤堂高虎像

## ③ 重要文化財（美術工芸品（彫刻））

【木造十一面観音立像（島ヶ原 観菩提寺）】 一木造。頭部に天冠台を着け、面部は豊顔木眼で白毫を持たず、極めて神秘的な面相をしている。手は三対で、第一対の左手は<sup>ひじ</sup>臂を曲げて蓮華を持ち、右手も同じく臂を曲げて施無畏の印を結んでいる。第二対の左手は下に伸びて水瓶を持ち、右手も同様に下に伸びて念珠を持っている。第三対の左手は外方に臂を曲げて<sup>さんこげき</sup>三鈷戟を取り、右手も同様に外方に臂を曲げて宝棒を持っている。体躯は豊かで、姿は端麗莊嚴である。本像は十一面観音立像としては珍しく



木造十一面観音立像



六臂であるうえに裳が2段に折れ返り、その上に2段に天衣を付けている点や、両足首に飾りを付けている点など、他にあまり類例を見ない。平安後期の作と考えられるが、前代の古い様相を残す仏像である。

【木造<sup>しゅんじょう</sup>俊乗上人坐像（富永 新大仏寺）】 鎌倉初期肖像彫刻の傑作である。俊乗坊<sup>ちようげん</sup>重源は、鎌倉初期に奈良東大寺の再興を成し遂げた名僧で、建仁2年（1202）頃に東大寺の伊賀別所として新大仏寺を創建した。像容は、僧頭老瘦の温容で眼は玉眼、体は黄灰青色の僧衣の上に淡赤色の袈裟を着ている。両手は身前に合わせて印を結び、足は結跏趺坐<sup>けっかふざ</sup>している。唇を真一文字に結び、喉仏が前に突き出



俊乗上人坐像

る表情など、意志の強固さが如実に表現されている。昭和12年（1937）の修理において、頭中に素彫の小仏像数体、数個の数珠顆、小石などが納入されているのが確認されている。

【木造<sup>しやうぶいけ いちばじ</sup>四天王立像（菖蒲池 市場寺）】 市場寺の本尊である阿弥陀如来坐像を守護する広目天・増長天・多聞天・持国天の4軀で、いずれも大半を一材から彫出し、像の一部に截金模様や彩色が残っている。ともに甲冑を着け、纏衣は両肩から懸かって下腹部をまわっている。両肘に美襟を付けて後方に翻し、足には靴を履いて2匹の邪鬼を踏んでいる。広目天は右手を屈臂して戒器を持ち、増長天は右手で宝剣を振りかざし、多聞天は右手に宝戟をとり、左手で宝塔を捧げ持っている。持国天は右手を前方中央に伸ばし、宝剣を左に向けて持っている。群像としての動勢表現に巧みで、県内でも最高水準の平安後期の四天王像とされる。



市場寺の四天王像（増長天）

【木造阿弥陀如来坐像（東谷 観音寺）】 寄木造。頭部は螺髪を表し、肉髻珠<sup>にくけいしゆ</sup>と白毫には水晶が入れられている。豊顔木眼で衲衣を偏袒右肩に着し、両手は臂を曲げて定印を結び、右足を上に結跏趺坐している。全体的に黒色を呈しているが、元は漆箔であったと考えられる。形がよく整って定朝様式を伝えるが、顔や姿に形式化した写実的な表現が見られ、制作時期は平安後



木造阿弥陀如来坐像

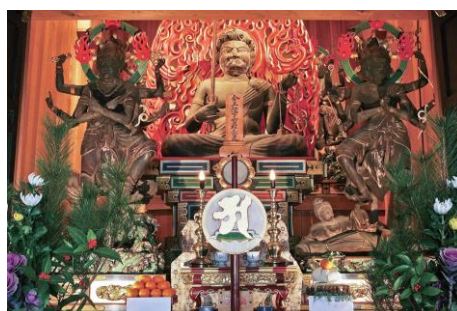
期から鎌倉初期と考えられる。

【木造薬師如来坐像（森寺 長隆寺）】 一木割矧造。頭部は螺髪を表し、肉髻珠と白毫には水晶が入れられている。豊顔木眼で、左手は臂を曲げて膝上で掌に薬壺を持ち、右手は臂を曲げて掌を前に向けている。衲衣を偏袒右肩に着し、腰部には裙を纏い、左足を上に結跏趺坐している。表面には漆箔が施されていたようだが、現在は剥落して古色を呈している。衣文の彫りが穏やかに浅く整えられ、線は流麗でよく定朝様式を伝えている。



木造薬師如来坐像

【木造五大明王像（古郡 常福寺）】 いずれも一木造の彩色像である。五大明王は、不動明王を中心に東西南北を降三世明王・軍荼利明王・金剛夜叉明王・大威徳明王が守護し、仏敵を威圧する諸尊である。手には宝剣などの武器を持ち、怒りの表情である忿怒相（ふんぬそう）をしている。不動明王は威厳に満ちた堂々たる像で、他の諸尊も瘦身ながら躍動感にあふれている。古様を留めながら、定朝が確立した新たな仏像彫刻の様式へと接近する平安後期の作とされる。



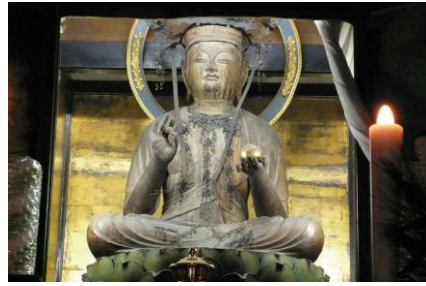
木造五大明王像

【木造日光月光菩薩立像（湯屋谷 蓮徳寺）】 両像とも頭体主要部を一材から彫出し、肩や手首などで材を寄せている。頭部には宝髻（ほうけい）を結び、天冠台を付けている。面部は豊顔木眼、白毫には水晶を入れている。条帛は左肩から懸かり、腰部以下に裙を付けている。天衣は両肩から懸かり、両肘から下に垂らしている。日光像は左手を曲げ、右手を伸ばして両手で日輪を持ち、月光像は右手を曲げ、左手を伸ばして月輪を持っている。当初の彩色や漆箔が剥落し、現在は素地が表れている。光背や台座は後世のものだが、像の表現には平安後期に流行した定朝様式が見られ、優しい顔立ち、平面的な衣文表現など平安後期の彫刻に共通する特徴を確認できる。



木造日光月光菩薩立像

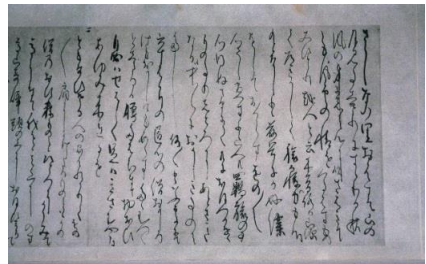
【木造虚空蔵菩薩坐像（山出 勝因寺）】 両腕や手首などは別材だが、体幹主要部は一木で造られている。頭部の宝髻・天冠台は彫出し、面部は豊顔彫眼である。左手は臂を曲げて宝珠を捧げ、右手は臂を曲げ前掌して一種の施無畏印を結んでいる。条帛を懸け、腰部に裳を着け、右足を上にして結跏趺坐している。宝冠や持物、台座、光背は後補のものである。『三国地志』や『伊水溫故』（いずれも県指定有形文化財）に空海作と記されている。



木造虚空蔵菩薩坐像

#### ④ 重要文化財（美術工芸品（書跡・典籍・古文書））

【更科紀行 芭蕉自筆稿本】 貞享5年（1688）に『笈のおい小文』の旅を終えた芭蕉が江戸への帰途、信濃更科の名月を仰ぎ、善光寺に詣でた際の紀行文と発句を綴った自筆の草稿である。元は懐紙5枚に書き継がれ、料紙には薄美濃紙が用いられている。本文は「さらしなの里おはすて山の月見の事」以下82行からなり、末尾に「はせを」の自署がある。文中には訂正の跡が著しく、所掲の句も抹消・加筆があり、草稿本であることがわかる。芭蕉の紀行文としては現存する唯一の草稿本で、『更科紀行』の推敲過程を明らかにする貴重なものである。本文末には芭蕉の高弟尚白による識語があり、本巻が芭蕉の真跡であると記している。



更科紀行 芭蕉自筆稿本

#### ⑤ 重要無形民俗文化財

【上野天神祭のダンジリ行事】 上野天神宮の秋祭として毎年10月に行われる。『永保えいほ記事略』（県指定有形文化財）の万治3年（1660）の記録に再興の記事があり、それ以前から何らかの祭礼が行われていたことをうかがわせる。宵々山に各町で印・楼車だんじりを引き出して飾り付けを行い、宵山では足揃えの儀を行う。楼車が町内を巡行し、鬼行列も上野相生町から三之町筋を練り歩く。本祭では御輿の渡御に続き、鬼行列と9基の印・楼車が供奉する。この行事は、神輿の



上野天神祭のダンジリ行事



渡御を中心とする祭りに仮装の行列（練物）や作り物が加わり、現在のような鬼行列や印・楼車で賑わう形態になったもので、類例の少ない貴重な行事である。平成 28 年（2016）にユネスコの無形文化遺産に登録されている。

【**勝手神社の神事踊**】 江戸中期から盛んに行われた風流踊りに類するもので、雨乞い系のかんこ踊りの代表的な踊りとされる。6名の踊り子は、竹の先に牡丹の造花「ホロ花」を付けて垂らした「オチズイ」を背負い、胸に抱いた鞆鼓<sup>かつこ</sup>を打ちながら踊る。踊り子の内側には4名の楽打<sup>がくうち</sup>がおり、赤い前だれの付いた笠を被って大太鼓を打つ。現在、ゆったりした調子の踊り4曲が伝わり、風流芸として地方的特色の顕著なものである。以前は7月の祇園祭に奉納されたが、現在は10月の第2日曜日の祭礼に奉納される。



勝手神社の神事踊

## ⑥ 史跡

【**御墓山古墳（佐那具町）**】 上野盆地北東部、柘植川左岸の南宮山頂から北東に延びる丘陵端部に、前方部を北東に向けて立地している県内最大規模の前方後円墳である。墳丘は2段に築成されているが、北側の前方部からは3段のような形状をしている。後円部頂の平坦面にくぼんだ箇所が見られ、盗掘坑を完全に埋め戻さず放置した痕跡と考えられる。また、後円部の北西側に造り出しと呼ばれる平坦部があり、その部分で埴輪を使った重要な祭祀儀礼が行われていたとされる。墳丘の側面には葺石が見られ、円筒埴輪・家形埴輪・蓋形埴輪の破片が採取されている。築造時期は、5世紀前半と考えられる。



御墓山古墳

【**城之越遺跡（比土）**】 木津川上流域の丘陵付近の平地に広がる古墳時代前期を盛期とする遺跡である。平成3年度（1991）の発掘調査により、溝の法面に石貼りを施し、溝が合流する地点に立石や階段状遺構を配した大溝と3カ所の井泉が検出された。この大溝からは祭祀に



城之越遺跡

使われた土器や木製品が多量に出土している。土器は、土師器の小型壺と高杯が大半を占め、壺の中には下部に孔を穿ったものがみられる。木製品には剣形や案といった祭儀用のものが含まれ、木製品のなかで一般的に多く出土する農耕具は見られない。このような出土遺物の内容から、大溝周辺では祭祀が執り行われ、その道具が大溝に廃棄されたものと考えられる。なお、大溝の石貼りや立石は、後の庭園につながる技術と造形美を示している。

【伊賀国庁跡（坂之下）】 伊賀市北部を西に流れる柘植川右岸の段丘上に立地する古代伊賀国の役所跡である。8世紀末から11世紀前半にかけて、大きく4期に分けられる遺構の変遷が確認されている。東西・南北41m程度の掘立柱塀や溝で区画された政庁域に、主要施設である正殿・前殿・脇殿が配置されている。正殿などの主要建物は、当初は掘立柱建物であったが、10世紀前半から後半にか



伊賀国庁跡

けて礎石立建物に建て替えられている。出土遺物には、墨で「国厨」と書かれた土器があり、遺跡の中心部には「こくつちよ（国町）」と称する地名が残る。国庁の南には東海道が東西に通り、真南の丘陵上には国分二寺が立地するなど、古代伊賀国において国庁、国分寺、官道などが計画的に配されたと考えられる。

【伊賀国分寺跡（西明寺）】 上野市街地の南東、上野城跡（史跡）より続く低丘陵上に立地している。奈良期に聖武天皇の勅願により全国に建立された国分僧寺の跡である。東西220m×南北240mを測る築地状の土塁によって囲まれた寺域のやや西寄りに、中門跡・金堂跡・講堂跡と考えられる基壇の高まりが残存する。また、寺域の東寄りには塔跡と想定される基壇状の高まりがみられる。伽藍の配置は、他国の国分寺にも一般的にみられるもので、伊賀国分寺は七堂伽藍を備えた本格的な古代寺院であったことがうかがえる。



伊賀国分寺跡



長楽山廃寺跡

【長楽山廃寺跡（西明寺）】 上野市街地の南東、上野城跡（史跡）より続く低丘陵上に伊賀



国分寺跡（史跡）と東西に並んで立地している。奈良期に聖武天皇の勅願により全国に建立された国分尼寺の跡で、東西 145m×南北 160mの規模を有し、周囲に築地状の土塁がわずかに残存している。伽藍の配置は、寺域のやや西寄りに南北に並ぶ形で、金堂・講堂といった建物の痕跡が基壇状の高まりとしてわずかに残されている。

【上野城跡（上野丸之内）】 上野市街地の北に位置する丘陵上に、筒井定次が城郭を構えたことに始まる。当時の天守は、現在の上水道配水池がある丘陵最高所に設けられたが、慶長 13 年（1608）に伊賀国へ入封した藤堂高虎は、筒井時代の二之丸までを本丸に取り込み、その二之丸であった部分を西側に拡張して高さ約 30m の高石垣（写真）を築いた。さらに、その拡張部分に五層の天守の建設を進めたが、完成直前の大風雨で崩壊し、天守は昭和期に入るまで再建されることはなかった。江戸期には、筒井時代の本丸跡に城代屋敷が建てられ、近年継続して実施された発掘調査において、南側に表向きの施設、北側に奥向きの施設を配した屋敷の構造が明らかになっている。



上野城跡

【旧崇広堂（上野丸之内）】 藤堂藩の藩校有造館の支校として、文政 4 年（1821）に 10 代藩主藤堂高兌<sup>たかさわ</sup>によって建てられた。崇広堂の名前は、中国の書物『書経』からとったもので、講堂（写真）に掲げる扁額の文字は米沢藩主上杉鷹山<sup>ようざん はるのり</sup>（治憲）の筆による。東側は講堂を中心とした文場、西側が武技場や馬場を有する武場として用いられ、藩校に通有の孔子廟がなかったことが特徴である。嘉永 7 年（1854）の安政伊賀地震で大きな被害を受けたが、文場を中心にいち早く復興し、講堂・講師控室・有恒寮・門・塀などは今も当時の様子を伝えている。近代になると武場は学校用地として使用され、現在は崇広中学校の敷地となっている。また、文場は図書館として用いられた後に保存整備事業が実施され、現在は一般に公開されている。



旧崇広堂

## ⑦ 特別天然記念物

オオサンショウウオは世界最大の両生類で、全長が1 m以上に成長する個体もみられる。頭部は扁平で大きく、体は暗褐色で不規則な黒色の斑紋がある。四肢は短く、前肢は4本指、後肢は5本指である。その形態が約3千万年前の化石とほとんど変わっていないことから「生きた化石」と呼ばれる。伊賀市内では木津川・服部川上流域を中心に、一部河合川流域にも生息が確認され、山地や水田、集落を流れる河川の岩場や岸辺の植物の間に生息している。



オオサンショウウオ

## 4-2 県指定文化財

### ① 有形文化財（建造物）

【<sup>いりまじり</sup>入交家住宅 主屋 長屋門 表屋 土蔵 附津普請奉行連署書状・新建物帳・屋敷絵図（上野相生町）】 藤堂藩の藩士であった入交家が拝領した屋敷である。主屋（写真）は北を正面とした入母屋造の茅葺で、東側を炊事のための土間、西側の大半と南側に突き出した部分を居室としている。長屋門は入母屋造の棧瓦葺、戸口の西脇に3畳、東脇に8畳と4畳半の小部屋がある。安政5年（1858）の建築とされる表屋は棧瓦葺、東面に鉄板葺の庇が付く切妻造になっている。寛政9年（1797）に設けられた土蔵を含め、江戸期の武家屋敷を構成する建物がまともに残り、内外とも当時のたたずまいをよく伝えている。



入交家住宅主屋

【菅原神社楼門・鐘楼（上野東町）】 楼門は菅原神社の正門で、元禄14年（1701）に着工されたことが2階大梁の墨書や『永保記事略』<sup>りやく</sup>（県指定有形文化財）からわかる。建物は三間一戸、入母屋造の本瓦葺で、下層は三手先の腰組で高欄付きの縁をめぐらし、上層は三手先組物で二軒繁垂木の軒を張り出させてい



菅原神社鐘楼

る。鐘楼は寛永4年（1627）の創建であるが、貞享5年（1688）に梵鐘を鋳直した際に建て替えられたとされる。桁行・梁間一間の四本柱式で、屋根は切妻造の本瓦葺、細部の装飾手法に近世的特色が顕著である。

【愛宕神社本殿（上野愛宕町）】 愛宕神社は、慶長5年（1600）に小天狗清蔵が創建した大福寺を母体に、藤堂高虎が元和2年（1616）に勝軍地蔵権現を勧請して新たな社殿を建立した。本殿は桁行五間、梁間二間の入母屋造で平入、三間向拝で一間は軒唐破風である。当初は檜皮葺であったが現在は銅板葺に改修されている。主要部は極彩色、他は朱塗りが施されている。



愛宕神社本殿

軒唐破風を構え、獣面木鼻や天井画など装飾が非常に多いのが特徴で、意匠的には17世紀後半の傾向を示している。棟札から文政2年（1819）・弘化2年（1845）に修理が施されたことがわかる。

【旧小田<sup>おた</sup>小学校本館（小田町）】 上野公園北西の高台に正面を西側に向けて建てられた木造擬洋風二階建の建造物である。寄棟造で棧瓦葺、壁は総漆喰仕上げになっている。明治8年（1875）に開設された小田学校が、同14年（1881）に啓迪<sup>けいてき</sup>学校と改称された際に建てられた。現存する小学校校舎としては県内最古の建築物で、玄関ポーチ上部のバルコニーなどに素朴な擬洋風意匠がみられる。平成2年（1990）から同6年（1994）にかけて半解体修理が行われ、太鼓楼が復元された。



旧小田小学校本館

【旧三重県第三中学校校舎（上野丸之内）】 上野高等学校に残る木造平屋建の擬洋風校舎で、明治33年（1900）に三重県第三中学校校舎として建てられた。中央の玄関から東西に細長い校舎が設けられ、東西両端で北に折れ、平面形ではコの字型を呈している。南に張り出した玄関ポーチは凝った造りで、屋根は入母屋造の破風を見せ、左右に3本のタスカン様式の円柱を配している。柱間にはアーチ形の細かい装飾が施され、軽快で抑制の効いた



旧三重県第三中学校校舎



華やかさをもつ建造物である。

【春日神社拝殿（川東）】 桁行七間、梁間三間、入母屋造の大型の拝殿で、かつては檜皮葺であったが、昭和 56 年（1981）に銅板葺に改められた。建立年・沿革ともに不詳だが、天正伊賀の乱の際には焼失を免れたと伝わる。建物の大部分は後世の修理によって改変され、特に柱は大半が江戸初期に取り替えられている。ただし、一部に面の大きな柱が残り、当初材を比較的に残す組物や虹梁の形式から、15 世紀中頃を下らない創建と考えられる。



春日神社拝殿

【猪田神社本殿（下郡）】 一間社流造の檜皮葺で、三方に浜縁がめぐらされている。正面の柱間には板唐戸、他の 3 面は板壁で、彩色は軸部の丹塗り、壁面の胡粉塗りを基調とし、虹梁・身舎柱上組物には極彩色が施されている。妻部の<sup>かえるまた</sup>褄股は装飾的に上下の横木の間に置くのみで、猪田に所在する猪田神社本殿と建築様式が類似して

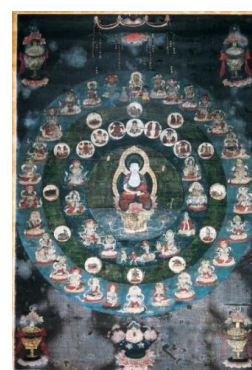


猪田神社拝殿

いる。社殿は天正伊賀の乱により焼失したが、慶長 9 年（1604）に猪田山出の小天狗清蔵が願主となって再建されたことが棟札からわかる。現在の本殿は天保 7 年（1836）に修理を行い、このときに慶長期の部材の一部を再使用している。

## ② 有形文化財（美術工芸品・絵画）

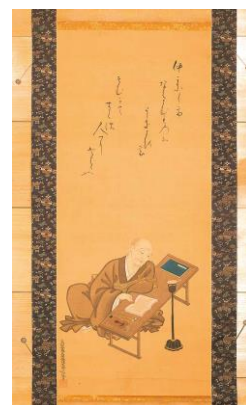
【絹本著色星曼荼羅図（長田 <sup>ながた</sup> 西蓮寺）】 天台座主慶円の作と伝えられる円曼荼羅の一例である。四重円からなり、中央円には釈迦金輪、二重円には上辺の小円内に北斗七星、下辺に九曜星を配している。三重円には小円内に十二宮、四重円には二十八宿を配列している。また、画面四隅に宝瓶、中央上部に天蓋、下方に玻璃器に挿した供花を配している。釈迦金輪及び地文・宝瓶・天蓋には截箔を施し、背面に寛文 11 年（1671）の修理記がみられる。平安末期から鎌倉初期にかけての作例と考えられる非常に古い星曼荼羅である。



絹本著色星曼荼羅図



【絹本着色兼好法師像（種生<sup>たな お</sup> 常楽寺）】 『徒然草』の作者として有名な兼好法師の文筆姿を描き、上部に画讃、左下に「土佐刑部権大輔 従五位下 藤原光成筆」の款記と落款がみられる。『徒然草』序段に示された執筆姿とも、第13段の「ひとり灯のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とする」ときの姿とも考えられる。肉身は墨細線で描き起こし、淡紅色の暈取りを施す入念な仕上げで、宮廷絵所預となった土佐光成の筆とされる。



絹本着色兼好法師像

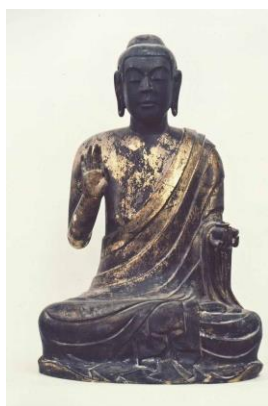
【三十六歌仙扁額（一之宮 敢国神社）】 紙本金地着色の三十六歌仙の画を3枚1組の計12面として、扁額に納めたものである。『公室年譜略』に「各三十六枚俱ニ近衛信基公筆画ハ山徳筆」とあることから、書は本阿弥光悦・松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」と称される近衛信基（信尹）の筆によるものとされる。本来は36面であったが、寛永13年（1636）に藤堂藩の2代藩主藤堂高次<sup>たかつぐ</sup>が敢国神社に護摩堂を建立した際、12面に仕立てられたものと考えられる。



三十六歌仙扁額

### ③ 有形文化財（美術工芸品・彫刻）

【木造薬師如来坐像（中友生<sup>なかとも の</sup> 見徳寺）】 童顔・童子形と呼ばれる白鳳仏の一群の作例につながるものである。やや面長で下膨れのふっくらした顔に、広い瞼や、ほほえみを浮かべた唇を配している。襟を折り返した大衣を偏袒右肩に着け、右手は胸前で施無畏印、左手は臂を曲げて掌を上<sup>う</sup>に薬壺を持ち、全面に漆箔が施されている。県内の仏像史の冒頭を飾る極めて貴重かつ重要な作例である。



木造薬師如来坐像

【木造大日如来坐像（森寺 長隆寺）】 一木造。頭部は宝髻を結び、地髪は素彫で薄い木製の筒形宝冠（後補）を戴き、宝冠帯を下げ、白毫相を表す。両手は臂<sup>ひじ</sup>を曲げて腹前で法界定印を結ぶ。腕釧、臂釧をつけるほか<sup>じょうはく</sup> 条<sup>く</sup> 帛、裙、腰布をつ



木造大日如来坐像

け左足を上に結跏趺坐している。古色を呈しているが、表面は漆箔が施され、一部に金泥が残っている。体部の奥行に厚みがなく、抑揚の少ない平らかな表現が腹部などにみられることから、制作は平安後期と考えられる。

【木造多聞天立像・広目天立像（島ヶ原観菩提寺）】 多聞天は、一木割矧造。楼門背面の右側に安置されている。革甲の下に鱗袖衣・広袖衣・袴を着け、沓を履いて邪鬼を踏みしめている。左手には戟を持ち、右手は腰に据えている。動きが少なく、仏法を守る四天王としては穏やかな表現である。平安後期の作と推定されるが、彩色は江戸期のものである。



木造多聞天立像



木造広目天立像

広目天は、一木割矧造。楼門背面の左側に安置されている。革甲の下に鱗袖衣・広袖衣・袴を着け、沓を履いて邪鬼を踏みしめている。左手は腰に据え、右手には宝棒を持っている。近世の彩色によって全体の印象をやや損ねているが、平安後期の作と推定される。

【上野天神祭供奉面（上野三之西町）】 上野天神祭の鬼行列で使われる供奉面である。鬼行列は、町々の悪疫退散と五穀豊穡を祈念して練り歩くが、元は藤堂高虎の眼病平癒の祈禱のお礼として能面を賜ったことが始まりといわれる。上野三之西町が所蔵する面は、小面・泥眼（写真）・小飛出・賢徳・義玄（悪尉）の能・狂言面5面、四天王の行道面1面である。制作年代は、江戸中・末期の作とされる義玄を除く5面が江戸初期とされ、小飛出は桃山期にさかのぼる可能性がある。

【上野天神祭供奉面（上野紺屋町）】 上野天神祭の鬼行列で使われる供奉面で、上野紺屋町が所蔵する面には、面裏に「叶」の刻銘が入った剣八天・弓八天の小面2面があり、桃山期に大和吉野から伊賀にかけて多くの作品を残した山田喜兵衛の作と判明している。他に狂言面の黒髭毘沙門・小武悪の2面、四天王の行道面2面、斧山伏・笈持の民俗面



上野天神祭供奉面(八天)



上野天神祭供奉面  
(阿古父尉)

2面、追難面<sup>ついな</sup>の将几持<sup>しょうぎもち</sup>、大癩見系<sup>おおべしみ</sup>の釣鐘<sup>あこぶじょう</sup>、阿古父尉<sup>えんのぎょうじや</sup>（役行者、写真）、義玄（蛇）がある。

【中ノ瀬磨崖仏（寺田）】 上野市街地から国道 163 号で大山田方面に向かう途中の岩壁に彫られた磨崖仏である。伝阿弥陀三尊像を中心に、東に地藏菩薩立像、西に不動明王立像を配している。伝阿弥陀三尊の中尊のみを半肉状に彫出し、他の像は線刻により表現している。この作風の違いをはじめ、両脇侍の法量の不揃い、全体の構成に統一感を欠く点などから、最初に伝阿弥陀三尊の中尊が彫出された後、鎌倉期から室町期にかけて順次、線刻の仏像が彫られたと考えられる。



中ノ瀬磨崖仏

#### ④ 有形文化財（美術工芸品・工芸品）

【上野天神祭山車幕（上野鍛冶町）】 上野天神祭の鍛冶町楼車<sup>だんじり</sup>（二東）の見送りに使用していたもので、2体の龍が綴織で描かれる。上方に正面向の龍を大きく、下方にこれを仰ぐ昇り龍を織り出し、龍の鱗に孔雀の羽を織り込んでいる。また、藍色系統の色で雲烟<sup>うんえん</sup>を表現し、色彩は纏縹彩色風に段を付けて、その濃淡を示している。龍の姿は勇猛壯絶で、雲や山の表現も自由自在、織線も厳しく精妙を極めている。



上野天神祭山車幕

【上野天神祭山車金具（上野福居町）】 上野天神祭の福居町楼車（三明）に使用される欄縁金具である。丸（饅頭）金具（写真）は、四分一魚々子<sup>ななこ</sup>地の中央に銀の梅鉢、周囲に五三の桐6個を金で配している。出八双金具（鍰金物）は、赤銅地に花菱亀甲を銀で置き、縁は金、中央に白象や獅子、麒麟を高肉彫している。入八双（隅）金具は地金を唐金とし、各々に「竹に虎」「雲竜」などの青龍・朱雀・白虎・玄武の四神に見立てた文様を色絵の手法を駆使して高肉彫している。欄縁の星金具に、幕末の津の名工工藤延寿が安政4年（1857）に製作した旨が刻まれている。



上野天神祭山車金具

【唐冠形 兜<sup>とうかんなりかぶと</sup>（上野丸之内）】 戦国末期に流行した変わり兜で、古代中国の冠を模したものである。兜鉢と、平小札を紐でおどした鍔は、いずれも錆下地黒



漆塗で、兜鉢の頂上背部に木製錆下地黒漆塗の巾子を装着している。特に工夫が凝らされているのが、纓に見立てた木製黒漆塗の後立で、1枚の全長は88.4cmを測る。豊臣秀吉所用のものを藤堂高虎が拝領し、さらに高虎から藤堂玄蕃家累代の軍功を賞して玄蕃家に与えられたと伝わる。昭和54年(1979)に当時の上野市に寄贈され、現在は伊賀文化産業城で展示されている。



唐冠形兜

【奥知 勇 収集古伊賀・古信楽器物類一括(丸柱)】 伊賀市に居住した医師奥知勇が収集した伊賀焼・信楽焼の古陶34件のコレクションで、本人の遺志により当時の上野市に寄贈された。古信楽は、檜垣文壺や蹲など、主に農事関連の器物類が大勢を占める中世期(室町期)の遺品である。古伊賀は、茶碗・茶入・花入・水指など近世期の茶陶類が大半を占めている。



奥知勇収集古伊賀・古信楽(火入)

【木造厨子 附木造閻魔坐像(長田 常住寺)】 閻魔堂の須弥壇中央に外・中・奥の入れ子状に構成された3基の厨子が置かれている。外厨子は宮殿形で、外部は素木、内部は千体阿弥陀如来が棚状に隙間なく配置されている。丸柱上の組物は出三斗、詰組となり、中央にのみ墓股を置く。屋根は入母屋造である。中厨子は木瓜厨子で、外は黒漆塗、内部は極彩色で十王及び侍者を描いている。奥厨子は春日厨子で、内部は金箔押し、扉の左右に地藏菩薩立像と侍者立像が極彩色で描かれ、中央に木造閻魔坐像が安置されている。



木造厨子 附木造閻魔坐像

## ⑤ 有形文化財(美術工芸品・書跡・典籍)

【松尾芭蕉 関係資料(上野丸之内)】 芭蕉に関連する一連の書跡である。これらの資料は、芭蕉が江戸や郷里上野、あるいは旅先で記したものである。芭蕉が凡兆・去来を相手に詠んだ歌仙で、後に『猿蓑』に収録された歌仙卷子本「市中は」、季吟から与えられた俳諧の作法書



松尾芭蕉像



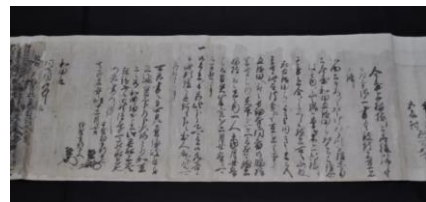
『埋木<sup>うもれぎ</sup>』、芭蕉病没の2日前に兄半左衛門に宛て自ら認めた遺言状<sup>ほつくきれ</sup>、発句切「古里や」、五句発句切「華咲きて」等といった貴重な資料が含まれる。

【永保記事略<sup>えいほきじりやく</sup>並びに同拾遺<sup>うねめ</sup>（藤堂采女家旧蔵本）（上野丸之内）】 寛永17年（1640）から寛保2年（1742）までの約100年間にわたり、伊賀を中心とする藤堂藩の法政や人事、習俗・災害・天変地異に至るまでの事柄を編年体に整理した記録である。本編8冊と拾遺1冊、名張市所蔵の附録1冊が指定文化財となっている。本書は、伊賀城代職を世襲した藤堂采女家による伊賀統治の記録といった私的な一面を持ち、本編は寛永17年（1640）10月の采女家初代<sup>もとのり</sup>元則の城代就任に始まり、寛保2年（1742）6月の4代元杜<sup>もともり</sup>の城代就任までの記録が収載されている。



永保記事略

【伊賀甲賀山論関係文書（上野丸之内）】 上柘植村と近江国和田村・五反田村の間で争われた山論に関する文書である。牛王宝印を用いた天正元年（1573）の起請文では、そろそろ峠付近の土地の利用権について、伊賀奉行十人惣・甲賀郡奉行十人惣の20名が名前を連ね、その規約を定めている。江戸期の文書は、天正元年の起請文に書かれた内容について、伊賀と近江の間でその解釈が争われたことを示すものである。



伊賀甲賀山論関係文書

## ⑥ 有形文化財（美術工芸品・歴史資料）

【藤堂藩伊賀作事方関連文書（上野玄蕃町）】 藤堂藩伊賀作事方の棟梁を務めた安場家に伝わる江戸末期の文書や図面類である。冊子仕立の『規矩尺集<sup>きくしゃくしゅう</sup>』8冊と『規矩之万記<sup>きくのよろずき</sup>』1冊、絵図（設計書）81枚がある。『規矩尺集』は、嘉永3年（1850）と同5年（1852）に安場重恭ら藤堂藩伊賀作事方により作成されたもので、上野城内や藤堂家の菩提寺である上行寺などの建築物に関する仕様、各部寸法、飾金物の意匠を記した実測集である。『規矩之万記』は、地固め、水縄張りから瓦葺き、挽家など様々な建築作業の



藤堂藩伊賀作事方関連文書

要点を解説した技術書である。

【伊賀上野城下絵図（上野向島町）】 四方を木津川・服部川・久米川で囲まれた上野城及び城下町が描かれている。上野城の本丸部分には、寛永 10 年（1633）の大風雨によって倒壊したとされる筒井氏の天守が描かれているため、絵図はそれ以前の様子を描いたものと考えられる。絵図には、町名や侍屋敷の住人の名前が詳細に記され、城内の御殿・屋敷・蔵なども絵画的に描かれていることから、上野城及び城下町の形成を知ることのできる貴重な資料である。



上野城下町絵図

なお、この絵図は、元禄 10 年（1697）に江戸染井にあった藤堂藩下屋敷の蔵から発見された 3 枚の古絵図のうちの 1 枚とされ、現存する上野城下町絵図の中では最古のものである。

## ⑦ 有形民俗文化財

【春日神社雨乞願解大絵馬 附相撲板番付（川東）】

春日神社に伝来する延享 4 年（1747）から昭和 14 年（1939）にかけて奉納された大型額仕立ての 13 点（高砂図 1、寺社参詣図 1、境内図 2、武者絵 3、芸能・物語絵 4、相撲図 2）の絵馬である。8 点に「雨乞願解」「雨乞成就願解」の墨書があり、早魃



春日神社雨乞願解大絵馬

続きに雨乞いを祈願し、その願解に奉納されたものとわかる。附の相撲板番付は、明治 4 年（1871）から昭和 25 年（1950）までの 5 点が残る。神社などへ雨乞い祈願のために相撲が奉納されることを考え合わせると、興味深い資料である。

【参宮講看板 附たわら屋看板（阿保）】 初瀬街道の阿保宿で旅館業を営んでいた「たわら屋」に、参宮講の定宿を示す江戸後期から明治期の講看板が残されている。看板には「長栄講」や「堂嶋講」といった講名、大坂や京都、摂津など講の所在地、参詣を世話する御師の名前などが彫られ、色彩を施したうえで漆をかける意匠



参宮講看板

を凝らした作りになっている。看板は来宿の予定日に軒先へ吊るされ、指定宿の目印とされた。

## ⑧ 無形民俗文化財

【<sup>あえくに</sup>敢国神社の獅子舞(敢国神社 一之宮)】 敢国神社の社伝によると、藤堂高虎が一宮の神幸式の列に獅子神楽を加え、上野城で正月の祝儀として奉奏させるなど、厚く庇護したことが始まりとされる。演目は、広前・四方神楽・五段神楽・剣の舞からなる儀式舞と、芸能的要素の強い鼻高・小竹の舞・荒舞・背つぎ舞があり、その形態は伊賀各地で行われている獅子舞の原型とされる。当初は神事・芸能として神に奉納されていたが、次第に氏子の家々に臨み、攘災招福の神楽になったと思われる。太平洋戦争による休止があったが、昭和 25 年(1950)に再開し、現在も年 3 回、社頭で奉納される。



敢国神社の獅子神楽

【正月堂の<sup>しゅしょうえ</sup>修正会(島ヶ原 観菩提寺)】 毎年 2 月 11 日に行われる<sup>だいひょうえ</sup>大餅会式は、大餅を<sup>とうや</sup>頭屋宅から「エットウ、エットウ」と大声をあげ、「セックモリ」と称する野菜などで作った鬼頭、ケズリバナ風の夫婦ツバメを付けたいばり栗、餅花を付けたナリバナなどで行列を組む。行列は正月堂へ練り込み、ナリバナなどを供え、祝いの数え歌を歌う。翌日の御行結願法要(写真)では、牛玉杖で乱打する「ほそのき驚覚法」、大導師の「ランジョオー」の声や、乱声方の鉦・太鼓・ホラ貝・拍子木の大音響のなか、火天・水天の錬行衆が本尊厨子の周囲を廻りながら、火と水を振りかざして荒々しく交錯する「<sup>だったん</sup>達陀の行法」などが行われる。



正月堂の修正会

【植木神社祇園祭(平田 植木神社)】 昭和 54 年(1979)から毎年 7 月最終の土・日曜日に行われている。土曜日の宵宮では、夕刻から平田地区の東町・中町・西町がそれぞれの楼車に提灯を灯し、笛・鉦・太鼓の囃子で、賑やかに町内を巡行する。日曜日の本祭では、勇壮に練る早朝の神輿に始まり、午後には祇園花の行列(写



植木神社祇園祭



真)が、竹幣・祇園花・花太鼓・神輿・神職・輿太鼓・神宝・献花・楼車の順で、町内を植木神社まで巡行する。祭りの最後に花奪いがあり、伊賀地域の祇園祭の典型といえる祭礼行事である。

#### 【陽夫多神社祇園祭の願之山行事（馬場 陽夫多神社）】

毎年8月1日、陽夫多神社の祇園祭で行われる。病氣平癒・家内安全の願懸けを解くため、文禄年間(1592~1596)より現在の姿で行われるようになったとされる。小踊りは、幼児6組12名が、踊りの指揮者である囃子上げの音頭にあわせて踊る。大踊り(写真)は、生杉葉で屋根を葺き、三方を白天幕で囲んで社紋入りの6本の幟を付け、3台の大太鼓を据え付けた木組の曳山(願之山)を綱で引きまわす。「さんよーりさんよーりげにもさーに」の囃子歌にあわせ、オチズイを背に付けた青年の踊り子6名が、曳山の大太鼓を打ちながら拝殿前を往復する。



陽夫多神社祇園祭の  
願之山行事

### ⑨ 史跡

【鍵屋の辻(小田町)】 上野城下町の西はずれ、奈良街道と小田・新居への道が交差する辻を「鍵屋の辻」と呼んでいる。寛永11年(1634)11月7日、弟を殺害された渡辺数馬が、義兄荒木又右衛門の助力を得て、仇敵河合又五郎を討ち果たした「伊賀越仇討」の場として著名である。当地には「みぎいせみち ひだりなら道」と刻する文政13年(1830)の道標が立ち、周辺は公園として整備されている。



鍵屋の辻

【蓑虫庵(上野西日南町)】 東麓庵・西麓庵・無名庵・瓢竹庵とともに芭蕉五庵に数えられる草庵で、唯一現存している。蕉門の高弟服部土芳により創建され、芭蕉の句「蓑虫の音を聞きに来よ草の庵」にちなんで「蓑虫庵」と呼ばれた。現存の建物は、木造茅葺、庇瓦葺の平屋建で、元は東の表門から出入りしていたが、現在は南側に出入口が設けられている。



蓑虫庵



## ⑩ 天然記念物

【西沢ののはなしょうぶ群落（西之澤）】 日本各地の湿地に自生しているノハナショウブは、ハナショウブの原種とされるアヤメ科の多年草で、毎年 6 月には赤紫色で基部中央が黄色の花を咲かせる。西之澤では、かつて平池周辺に自生していたノハナショウブを保護し、地元の方により大切に維持・管理されている。



西沢のノハナショウブ

## 4-3 市指定文化財

### ① 有形文化財（建造物）

【伊賀文化産業城（上野丸之内）】 木造本瓦葺の 3 層の大天守と 2 層の小天守からなる複合式天守閣で、大天守と小天守の間には高麗門が設けられている。外観は白亜の漆喰塗の純日本建築様式で、藤堂高虎が築いた天守台に、地元選出の代議士川崎克<sup>かわさきかつ</sup>が昭和 10 年（1935）に私財を投じて建設した。復興天守としては数少ない木造建築である。



伊賀文化産業城

【西町集議所（上野西町）】 現在は上野西町の集会所として用いられているが、明治期には米問屋を営む商家であった。主屋（写真）は切妻造、平入の建物である。間取りは座敷廻りを中心に大きく改変されているが、表側の居室列や土間沿いの居室廻りの差鴨居・大引天井などには当初材が確認できる。主屋の裏手には、井戸屋形や風呂・雪隠のための付属屋、敷地の最奥に間口四間半、奥行三間の大型の米蔵が残り、当時の上層商家の家屋配置を知ることができる。



西町集議所

【成瀬平馬家長屋門（上野丸之内）】 成瀬平馬家は藤堂藩に仕えた上級家臣で、幕末の上野城下町絵図を見ると、現在の屋敷地に名前を確



成瀬平馬家長屋門

認できる。長屋門は正面上部が漆喰塗り、下部は下見板張りになっている。門の東西に部屋を有し、東側の部屋は3畳と4畳、さらに奥に6畳の座敷がある。長らく居宅として使用されていたため改変がみられるが、門扉と潜戸には飾り金具が残され、南側の武者窓も建築当初のままと考えられる。当時の武家屋敷の様相がわかる貴重な建築物である。令和2年（2020）に保存修理を終え、当時の姿を見ることができる。

【旧上野市庁舎（上野丸之内）】 モダニズム建築を代表する建築家坂倉準三の設計によって昭和39年（1964）に竣工した。緩やかに傾斜する斜面を巧みに利用し、周囲の景観に配慮した低層建築になっている。外観は杉板の型枠によるコンクリート打ち放しの柱と梁が特徴で、大きく張り出した軒によってピロティが形成されている。内部は開放的な吹き抜けの玄関ホール、

1階南側は水平連続窓と高い天井による明るく大きな空間が設けられ、2階は議場を中心として南北両側に屋上庭園を配置し、それらの周囲を回廊がめぐっている。



旧上野市庁舎

## ② 有形文化財（絵画）

【観音寺の古絵図（島ヶ原）】 <sup>かんぼだいじ</sup> 観音寺の本堂・楼門・僧坊などの諸伽藍のほか、鎮守諏訪明神などが描かれている。伽藍の配置は『三国地志』附図（県指定有形文化財）の「阿拝観音寺故図」と同じであるが、本堂脇の石塔の構造や、経堂脇の古木の有無など、細部に異なる点が確認できる。



観音寺の古絵図

## ③ 有形文化財（彫刻）

【石造十三仏（守田町）】 一辺2m近い自然石の一面を平らにし、向かって右側に舟形光背をもつ地藏菩薩立像、左側には長方形の枠を彫り込み、十三仏坐像が5段に薄肉彫されている。十三仏は上段に1体、その下4段には3体ずつが浮彫されている。地藏菩薩立像の下に「永正十五天戌子（1518）四月廿四日」、



大川地藏

十三仏の両脇に「永正十七年庚辰（1520）二月造立」「本願施主道忍」などの銘文が確認できる。

【大川地蔵（磨崖仏）（治田）】<sup>はった</sup> 伊賀地域で最大規模の磨崖仏で、名張川に面した崖面に彫られている。中央に大きく地蔵菩薩立像が彫られ、その左右に閻魔王と泰山王、左側の別の崖面にも十王及び供養像と思われる2体の磨崖仏が確認できる。

#### ④ 有形文化財（工芸品）

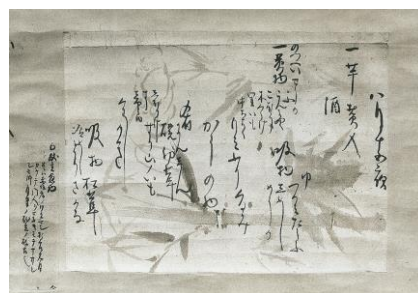
【湯釜（一之宮 敢国神社）】<sup>あえくに</sup> 三脚がつく铸铁製の湯釜が2つあり、大きい釜に慶長3年（1598）、小さい釜に慶長18年（1613）の铸造銘がある。また、大きい釜には「ホンクワンイタセイサウ（本願猪田清蔵）」と刻銘があり、天正伊賀の乱後、伊賀地域の寺社の復興に尽力した小天狗清蔵の寄進であることがわかる。



湯釜

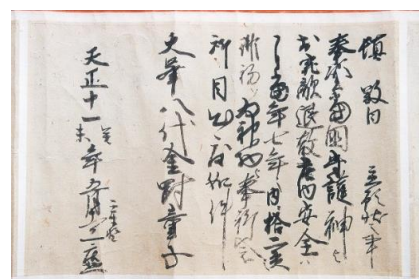
#### ⑤ 有形文化財（書跡・典籍・古文書）

【紙本墨書芭蕉<sup>ばしょう</sup>自筆月見の献立（上野丸之内）】 元禄7年（1694）8月15日の中秋の名月、芭蕉は赤坂の新庵の披露を兼ねて多数の門人を招き、月見の宴を催した。その際に芭蕉自ら筆をとった献立書で、郷土料理であるのっぺいや松茸の吸物など、門人をもてなした料理名が並ぶ。



紙本墨書芭蕉自筆月見の献立

【春日神社古文書（川東 春日神社）】 天正11年（1583）5月に壬生野莊惣が怨敵退散・莊内安堵を願って作成した立願状4点、天正13年2月に馬屋・因幡なる人物が壬生野地奉行に宛てた茶湯本についての申し入れの文書1点、下津屋などが作成した借米の受け取りに関する天正13年（1585）4月の文書5点と年欠文書1点が残され、



春日神社古文書

「春日神社古記録」と題された卷子本に装丁されている。さらに長屋祭に関する宮座文書1点、貞享3年（1686）2月に作成された西之澤村の田方・畠方・新田の各内検帳が残されている。

【島ヶ原本陣御茶屋文書（島ヶ原）】 大和街道の宿場であった島ヶ原に残る本陣と御茶屋に関する文書である。文書には、藤堂藩が藩の休泊施設であった



御茶屋に設置していた家具・調度品や生活用具の一覧、寛保2年(1742)の火災後に再建された本陣・御茶屋の見取図などが残る。また、本陣の記録では大和街道を利用した諸大名に加え、伊能忠敬をはじめとする幕府天文方、イギリスの初代駐日総領事ラザフォード・オールコックらの宿泊が確認できる。



島ヶ原本陣御茶屋文書

## ⑥ 有形文化財（歴史資料）

【上野城下町絵図（上野丸之内）】 藤堂藩の絵師上西庄五郎（宗牧）家の子孫から譲渡されたものである。伊賀加判奉行の役屋敷に水上権太夫と安波忠兵衛の名前が確認できることなどから、正徳5年(1715)頃の様子を描いた絵図と推定される。絵図は区画の用途により色分けがなされ、「柿色ハ侍屋敷」「黄色ハ町屋」「黒色ハ寺」などの凡例が付されている。さらに侍屋敷や寺院の区画には、居住する藩士の名前や寺院名が書き込まれ、その区画の寸法が詳細に記されている。



上野城下町絵図

【元禄13年伊賀国絵図（上野丸之内）】 藤堂藩の絵師上西庄五郎（宗牧）家の子孫から譲渡されたものである。江戸期には、慶長・正保・元禄・天保期の4回、幕府から各藩に国絵図の作製が指示された。元禄国絵図は元禄9年(1696)に作製が命じられたが、『宗国史』(県指定有形文化財)によると藤堂藩は同13年(1700)に完成した絵図を幕府に提出したようで、本図はその控えと考えられる。山や河川、街道などが描写され、郡ごとに色分けされた楕円形の枠内に村名と石高、白塗りの四角形で示された城下町には城名「上野城」と城主名「藤堂和泉守」とが記されている。



伊賀国絵図

## ⑦ 有形文化財（考古資料）

【<sup>しもごおり</sup>下郡遺跡出土木簡（下郡）】 下郡遺跡は、弥生後期から中世までの複合遺跡である。木簡は、伊賀地域初の古代の木簡出土例として、昭和53年(1978)



の発掘調査で奈良・平安期の井戸から出土した。下半部が転用のため薄く削られ、墨書の判読が困難であるが、上部に「沓縫阿備麻呂」なる人物名、祖の出納に関わる「出可祖稻七束四把四分」の文字、さらに「延暦」の年号が確認できる。下郡遺跡周辺は、古くから郡家の推定地とされ、木簡も沓縫阿備麻呂が郡司に提出した徴税の記録と考えられる。



下郡遺跡出土木簡

## ⑧ 有形民俗文化財

【菅原神社 算額（上野東町 菅原神社）】 算額は、和算の問題や解法を額に記し、神社仏閣に奉納した絵馬の一種である。菅原神社には、嘉永7年（1854）に東町の蝙蝠堂門人喰代屋庄右衛門から奉納された算額が残り、幾何の問題5問とその解法が示されている。



菅原神社 算額

【上野天神祭鍛冶町<sup>だんじり</sup>楼車前幕（上野鍛冶町）】 上野天神祭の鍛冶町楼車（二東）の前幕に使用されていたものである。現在は復元新調した幕が使用され、原品は上野鍛冶町で保管されている。幕の中央部に大きな白象、その周囲に唐子や松樹を配し、白象は肉入れ刺繍を行うことで立体的に表現されている。



上野天神祭鍛冶町楼車前幕

## ⑨ 無形民俗文化財

【田守神社秋祭（蔵縄手 田守神社）】 祭神を神社西方にある御旅所へ迎える神事である。渡御の行列は、鬼・母衣花（写真）・大御幣・神輿・獅子舞などで構成され、御旅所で獅子神楽の奉納、舞姫の舞や祝詞奏上などを行い帰社する。その後、祭礼の終了と感謝を奉告する貴箸神事という箸投げ神事が行われる。



田守神社秋祭

【富永的祭（富永）】 五穀豊穰と健康を願う的へと矢を放ち、中心の黒丸に当たれば、その年の豊作が期待される神事である。富永区の中から毎年6名が当屋を務める。祭礼の中心で



富永的祭

ある的射式は、菅原神社跡地に設けられた的場で行われ、注連縄を張った結界の内から当屋の若手4名が順番に約10m離れた的に矢を放つ。

## ⑩ 史跡

【鳴塚古墳（鳳凰寺）】 山田盆地東方の谷あい<sup>ぼ う じ</sup>に造られた前方後円墳で、前方部が東北東、後円部が鳳凰寺集落を向いている。後円部には、南方に開口する片袖式の横穴式石室が造られている。乳文鏡のほか、勾玉や管玉などの玉類、須恵器などが豊富に出土しており、前方後円墳終末期を代表する首長墓と考えられる。

【垂園森と哀園森（市部）】<sup>たれそのもり あわれそのもり</sup> 清少納言の『枕草子』に記載がみられる垂園森（写真）は、伊賀鉄道市部駅の東方約200mの田園の中にある。古木が茂り、社には大物主神が祀られている。垂園森の北約500mにある哀園森とともに古くから歌の名所として知られ、この地を題材とした紀貫之や西行の和歌、服部土芳の俳句などが残されている。



鳴塚古墳



垂園森

## ⑪ 天然記念物

【ギフチョウ】 アゲハチョウの仲間、本州の里山に生息している。成虫は春に発生し、4月頃に気温の上昇とともに飛翔する。その後、雌はカンアオイの葉の裏側に卵を10個程度産みつける。2～3週間でふ化した幼虫は、カンアオイの葉を食べて生長し、4回の脱皮を経て、ふ化後約1ヶ月でさなぎとなって一年の大半を過ごす。



ギフチョウ

## 4-4 登録有形文化財（建造物）

【中森家住宅主屋・離れ・前蔵・蔵・門及び土塀・井戸屋形及び板塀（上野玄蕃町）】 藤堂新七郎家の家臣屋敷で、明治3年（1870）の屋敷図では中森孫兵衛の名前が確認できる。主屋は木造平屋建、瓦葺の質実な造りで、大正期に



中森家住宅主屋ほか

増築された新座敷と呼ばれる離れは、落ち着きあるたたずまいになっている。屋敷門は2本の親柱に冠木を通し、腕木と出桁で支える木戸門、土塀は藁すさ入りの荒壁で、上野城下町における武家屋敷の風情を今に伝えている。

【赤井家住宅主屋・茶室・土蔵・長屋門・土塀（上野忍町）】 藤堂藩の藩士であった赤井家が拝領した屋敷である。中之立町通りに面する東側を正面として、江戸末期に建てられたとみられる木造平屋建、入母屋造で棧瓦葺の長屋門（写真）と土蔵が並ぶ。長屋門の正面には主屋があり、主屋の東南、土蔵との間に茶室がある。建築年代の最も古い長屋門は、北寄りに門口を構え、正面は<sup>ささらこしたみ</sup>彫子下見で上部を漆喰塗りとし、南端に出格子窓を付けた重厚な外観を有する。数少ない武家屋敷の遺構として貴重である。



赤井家住宅主屋ほか



寺村家住宅主屋ほか

【寺村家住宅主屋・前蔵（上野福居町）】 上野市街地に残る江戸後期に建てられた町屋である。元は両替商森川氏の居宅で、角地に建っている。主屋（写真）は西を正面とした入母屋造の棧瓦葺、妻入の建物で、表側は店舗、裏に居室が配されている。前蔵は、主屋の南に棟を表通りに平行にして建ち、江戸期の面影を良く残している。



栄楽館南棟ほか

【栄楽館南棟・東棟・土蔵・門及び塀（上野相生町）】 栄楽館は江戸期の生薬問屋を改造し、明治6年（1873）に料亭「栄楽亭」として開業した。かつては昭和歌謡を代表する作詞家の野口雨情、作曲家の中山晋平コンビも遊んだといわれ、昭和58年（1983）に廃業となった後は、主人宅として使用されていた。その後、建物が市に寄贈され、平成7年（1995）から同31年（2019）まで生涯学習施設として利用された。室内には扇や竹の意匠が見られ、網代天井など部屋ごとに異なる細工が施されている。

【北泉家住宅主屋（旧上野警察署庁舎）（上野丸之内）】 明治21年（1888）に建てられた擬洋風建築の警察署庁舎で、県内各地の警察庁舎のモデルになった



といわれる。木造平屋建、寄棟造の棧瓦葺で、当初は上野城の東大手門付近にあったが、昭和7年（1932）に三重合同新聞社を経営していた北泉清に払い下げられ、同13年（1938）に社屋として現在地に移築された。外観は下見板張外壁を用い、入口には切妻屋根、縦長の上下窓には独特な小庇を取り付け、隅柱などとともに彩色が施されている。



北泉家住宅(旧上野警察署)

### 【伊賀鉄道上野市駅舎・桑町跨線橋・小田第二暗渠・小田拱橋（上野丸之内）】

上野市駅舎（写真）は、大正年間に伊賀軌道の「上野町駅」として竣工した木造三階建、鋼板葺き腰折屋根の建物である。1階はコンコースと駅務室、2階は駅員の仮眠室等として使われ、3階には社長室があった。昭和16年（1941）の市制施行にともない「上野市駅」に



伊賀鉄道上野市駅舎

改称された。桑町跨線橋は大正11年（1922）

竣工の煉瓦積アーチ橋で、線路敷と上部の市道は直交せず、橋脚とアーチがやや斜めに交差している。小田第二暗渠は大正5年（1916）に構築され、花崗岩を積み上げた橋脚の上に同じく花崗岩の切石を載せた石蓋式の構造は、極めて珍しい鉄道暗渠である。小田拱橋も同じく大正5年に構築された煉瓦積アーチ隧道で、現在も日常的な通行に使用され、「マンボ」の呼び名で親しまれている。

【上野文化センター（上野中町）】 大正11年（1922）に建てられた木造三階建のモダンな建物である。当初は倉庫として使用されていたが、昭和40年（1965）から「上野文化センター」の名称で趣味・教養施設となり、カフェとして活用されていた時期もあった。外観は1階を花崗岩の石貼り、2階以上はモルタル塗りで、屋根は寄棟造の鉄板葺である。戦前の上野市街地の面影を伝える貴重な建築物である。

【一乃湯本館・門（上野西日南町）】 にしひなたまち 石柱の門は、大正15年（昭和元年・1926）に「草津湯」として開業した当時のもので、昭和25年（1950）に「一乃湯」として開業した際にネオン管が設置された。唐破風の玄関は、柱上



一乃湯本館



部に斗が組まれ、<sup>ます</sup>蟄股で虹梁を受けている。天井は格天井になっており、総じて寺社風の造りである。脱衣場は、流木を加工した欄間や折上格天井など和風を凝らし、浴場入口が花模様のテラコッタやアーチ状に色ガラスを嵌めて洋風を醸しているのとは対照的である。

【<sup>ながたにえん</sup>長谷園大正館・登り窯・主屋・別荘・離れ・蔵・奥の蔵・展示室・工房・体験工房・門及び塀（丸柱）】 天保3年（1832）

創業の伊賀焼窯元として知られる長谷園の建物である。旧事務所の大正館（写真）は大正後期に建てられ、正面入口には印象的な意匠のアーチ型庇に飾り窓が設けられている。登り窯は、北に焚き口を有する連房式登り窯である。主屋は、明治期に建てられた農家型の建物で、間取りは玄関左に六間取りの和室、右手は土間や厨房になっている。別荘は大正期に増築され、主屋から離れを経て廊下で繋がる。その離れは明治期の建築で、8畳の二間続きの和室を有する。これらの建物は、展示室や工房を含め、明治・大正期の窯元の様子を知ることのできる建物群である。



長谷園大正館

【料理旅館梅家（平田）】 伊賀街道の宿場町であった平田で明治期から営業を続ける料理旅館である。下屋のある平入の建物は明治32年（1899）の記録が残り、大正7年（1918）から同8年（1919）にかけて建物を二階建に増築している。1階は、西側を土間とする四間取りを基本とし、2階は中廊下の左右に部屋を配している。外観は1階正面に欄間付堅格子戸を並べ、下屋の東西に天女と鷹の鬼瓦、東西脇の内開扉に蝙蝠の意匠を施すなど街道を行く人びとを楽しませる設えとなっている。



料理旅館梅屋

#### 4-5 特産品・菓子・工芸品・料理など

伊賀地域は、その立地から東西文化の接続点でもあり、その歴史を踏まえた独特の食文化や料理などが生まれた。これらも古くから連綿と伝えられ、将来へも継承していきたいものである。

##### ① 特産品

【伊賀米】 伊賀地域の特産品の一つとして外せない「伊賀米」は、古琵琶湖層と呼ばれる肥沃な土壌と寒暖の差が激しい盆地で育つ。味と香り、粘りが整った米は、大坂（大阪府）にあった藤堂藩の蔵屋敷（現在大阪造幣局敷地）で貯蔵され、藩の財政を支える重要な資源として活用されていた。



伊賀米

藤堂家の家臣であった西嶋八兵衛は、水利や灌漑の技術に長け、伊賀米を作るための農業用水確保に尽力した人物として知られる。干ばつに悩まされていた伊賀国に多くのため池を造った。

【伊賀肉（伊賀牛）】 伊賀地域は、年平均気温が約 14℃と県内でも低く、四方を山に囲まれた盆地特有の寒暖の差がある気候や、布引山脈の良質な水などの条件が牛の肥育に適している。そのような条件や風土、長い歴史がつくりあげた伊賀牛は、「肉色鮮やか初霜の如し 食して柔らかく風味よし」と謳われ称される銘柄牛である。



伊賀肉

鎌倉時代末期から和牛は役利用され、牛の生産地として延慶3年（1310）の「国牛十図」に、「大和牛」として伊賀牛の記載がある。食肉としては、江戸時代に伊賀忍者が、牛の肉を乾燥させ、保存食として携帯していたと伝えられ、この忍者の干し肉が伊賀牛のルーツともいわれている。

【伊賀酒】 伊賀地域で造られる日本酒は、大粒で軟質な米が良いとされ、「山田錦」はその代表格である。伊賀地方では、三重県内の山田錦の大部分を生産しており、酒造りに適した米が豊富にある。また、麹菌の活動を促す“心白”を発現させるためには、伊賀地区のように昼夜の寒暖の差が大きい山間部が最適である。また、伊賀地方が位置する紀伊山地は、日本で一・二の多雨地帯で、上野盆地には、それら周りの山麓からの清冽な伏流水がこんこんと湧き出ており、水質は軟水が多く、きめ細やかでまろやかな味わい的高级酒に醸し上がる。日本酒は低温で仕込み、低温で熟成させる。伊賀の風



伊賀酒

土は、乾燥寒冷になる内陸性気候で、上野盆地特有の冬の厳しい寒さは、吟醸酒などの高品質な酒造りにとっては最適であるといえる。

酒造りに適した気候と良質な米、美しい水に恵まれた伊賀には古くから多くの酒蔵があり、日本酒造りが盛んに行われてきた。時代と共に酒蔵の数は減ったが、現在も多数の酒蔵があり、各蔵独自の個性的な日本酒を醸している。また、現存する酒蔵はすべて 100 年以上の歴史があり、その殆どが手仕込みの少数生産で、酒米の栽培から手掛ける蔵もある。

## ② 和菓子

上野城下町は、上野盆地内の産物の集散地として、政治・経済共に賑わいを増し、元禄年間（1688～1704）には俳聖松尾芭蕉<sup>まつお ばしゅう</sup>を世に送るほどの文化都市となった。城下町特有の「茶の湯文化」も根付き、茶席に欠かせない茶菓子の必要性から和菓子屋もたくさん建ち並んだ。現在でも、上野城下町区域には人口に対し和菓子屋が多く存在している。



和菓子

【かたやき】 かたやきは、伊賀忍者が携帯した携行食、非常食が元といわれている。非常に硬く、刀の鐔などに打ち付けて割り、口に含み唾液でふやかしながら食した。

伊賀地域には、地元の名物として、かたやきを取り扱う菓子店が多く存在する。一般の醤油せんべいとは違い食味はやや甘い。表面に軽くふられた青海苔がアクセントとなって独特の風味を出す。

【丁稚ようかん】 昔から伊賀地域で親しまれてきた伝統銘菓に、丁稚ようかんがある。丁稚ようかんの名前の由来には諸説あるが、江戸時代後期に、丁稚が練り羊羹<sup>ようかん</sup>を作った後、鍋に残った羊羹に水を混ぜ、水羊羹のようにしたものを、丁稚が好んで食べていたことから丁稚ようかんと呼ばれるようになったといわれる。

水羊羹より甘さは控えめで舌触りと口解け感がよく、みずみずしい丁稚ようかんは、日持ちしないので、冷蔵庫がなかった頃、夏場は作れず、冬季の菓子だったことや、10月に入ると新小豆が収穫され、餡が一番美味しい旬の時期に作っていたことなどから、寒い冬に暖かい部屋でよく冷えた丁稚ようかんを食べるのが元々の伊賀の食べ方である。昔ながらの丁稚ようかんも、それぞれの店によって、甘さや固さが微妙に違い、市民は自分の最良の店で購入する。

【おしもん】 伊賀地域では、昔から冠婚葬祭の際の引き出物には「おしもん」がつきものだった。材料の寒梅粉（もち米をもちにして、のばして焼いて粉にしたもの）を、砂糖と合わせて木型へ入れて中に餡を入れて押したもので、結婚式や葬儀等の慶事・弔事に使われる伊賀ならではの一品である。店ごとに趣向を凝らした型があり、寒梅粉も独自の配合や色合いがあり、様々な「おしもん」がある。

寒梅粉の風味とあんの良い甘みが絶妙の逸品で、中の餡は白餡が多いようである。伊賀は盆地で山に囲まれているため、流通が今のように発達していなかった時代、鯛等海の幸がなかなか手に入りにくく、冠婚葬祭の引き出物に「おしもんの鯛」を鯛等の代用品として用いていた。

【ながさき】 「ながさき」は、茶席でも好まれた干菓子で、なぜ、「ながさき」と言われるようになったのかは、詳細は不明であるが、昔長崎から来た和菓子職人が、伊賀の地に広めたからとか、使用している黒砂糖のことを当時「ながさき」と呼んだからともいわれている。芭蕉の俳句に因み、短冊状に切った形で販売していることが多い。

【まいづる】 文化年間（1804～1817）に、伊賀地域の中央部にあった四十九村に鶴が舞い降りるという記録があり、この地に舞い降り力尽きた鶴を葬ったという説話が残っている。その伝説の鶴をかたどって作られた伝統菓子が「まいづる」と呼ばれ、生姜砂糖を麩焼きの薄種で巻き上げた茶菓子となっている。

### ③ 食文化

【雑煮（丸餅文化）】 伊賀地域は、行政区分では東海や中部に包含されるが、鈴鹿山脈・布引山地以西は木津川流域にあり、文化や言葉のアクセント、料理の味付けなど、むしろ関西圏に属する。この状況は民俗文化によく現れている。それを代表するのが正月の餅の形である。鈴鹿山脈・布引山地以东の伊勢地域が角餅であるのに対し、伊賀地域は丸餅で味噌汁の雑煮を食する。

雑煮の味噌は、京都からの流入による白味噌とは限らない。田舎で自作する田舎味噌があれば、伝統的な玉味噌もある。また、八丁味噌や赤出汁が全くないいとはいえないが、少なくとも澄まし汁でないことは確かなようである。

各家庭では、餅の供給方法はそれぞれで、餅屋、自宅、スーパーといろいろであるが、農業をする家庭では、花びら餅といって、餅を小さく手でちぎり成型して押すだけの円形の餅が作られている。これ以外に、伸し餅とい<sup>の</sup>って、餅箱に一升の餅を流し込み、冷えたら餅切り器で切って、切り餅にして食べたりと様々であるが、基本的には花びら餅が、味噌汁の椀の中に入った雑煮となっ



ている。

【田楽（豆腐田楽）】 豆腐に味噌だれをつけて、香ばしく焼き上げた伊賀の郷土料理が「豆腐田楽」である。四方を山に囲まれた伊賀地域は、昔は海の幸が手に入りにくかったため、貴重なタンパク源として重宝されていたのが、豊富に採れる大豆を使ってつくる、豆腐や味噌であった。伊賀地方では、正月や花見など、人が多く集まるときの御馳走として、自家製の味噌を玉のように丸めて吊るし熟成させた「玉味噌」を、豆腐に塗って炭火で香ばしく炙った豆腐田楽をふるまっていた。

平安時代から室町時代までに、田植えのときに豊作を祈って笛や鼓を鳴らし、唄い舞い、田の神を鎮める「田楽舞」「田楽踊り」が流行した。やがてそれを田楽法師が、寺院に奉納する行事と変化した。白袴を履き、色のついた帷子かたびらを着て高足こうそくという竹馬のような高い竿につかまって踊る「高足の曲」という演目があり、豆腐に味噌をつけて串を刺した食べ物がそのときの田楽法師の様子に似ていたことから「田楽」という名がついたといわれている。

【漬物（瓜漬＝鉄砲漬、ひのな漬）】 伊賀地域で古くから親しまれている漬物。鉄砲に火薬を詰める姿に似た「鉄砲漬け」の製法で作られている。伊賀盆地特産の白瓜の芯を抜き、その中にしそ・生姜・大根・胡瓜等を細かく刻んだ物を詰め、たまり醤油にてしっかり漬けたもので2年、比較的浅漬けのもので1年の間自然熟成させる。伊賀盆地は、内陸型の盆地気候であるため、夏は猛暑となり食欲も低下するが、この漬物があれば御飯が喉を通る。

また、快い歯ごたえと素朴な味わいで、伊賀地域の冬の食卓には欠かせないのが「ひのな漬」で、名前のとおり滋賀県蒲生郡「日野町」が発祥の細長い形をした赤かぶの一品種である。「ひの菜」は、現在は滋賀県や京都府、三重県などで栽培され、伊賀地方の名産でもある。

伊賀地域の霊峰、霊山の清らかな水に育まれ、秋から晩秋にかけて旬を迎えるひの菜は、独特の辛味・苦味があり、昔ながらの本仕込みで糠漬けにして「ひのな漬」となる。夏は瓜漬、冬はひのな漬と、米どころ伊賀は漬物も名産地である。

#### 4-6 日本遺産「忍びの里 伊賀・甲賀」

忍者は今やテレビやアニメを通じて海外にまで広く知れ渡り、奇抜なアクションで人々を魅了している。江戸時代以降、歌舞伎や小説の世界で、不思議な術を使って悪者を討つというストーリーで人気を博してきた。一方、イエズス

会が編纂した『日葡辞書』には、忍者は「Xinobi」（シノビ）として記載され、17世紀初頭には海外の人々にまで伝わり、そこには「戦争の際に、状況を探るために、夜、または、こっそりと隠れて城内へよじ登ったり陣営内に入ったりする間諜」として紹介されている。

各地の大名に仕え、敵情を探りながら奇襲戦に参加する戦国時代の忍者について、その歴史の実像、すなわち「リアル忍者」の姿を明らかにすることが求められている。

伊賀と甲賀は、中世から近世にかけて活躍した忍者の発祥地として名高く、忍者の里を歩くと、土を盛り上げ一辺 50m程の土塁で四方を囲んだ館タイプの城館が数多くある。また、忍者の結束の場であった村々の鎮守も往時の姿が残されている。それらは、日本遺産ストーリーの構成文化財として位置づけられている。本市は甲賀市とともに、平成 29 年（2017）、日本遺産「忍びの里 伊賀・甲賀～リアル忍者を求めて～」に認定されている。

表 7 日本遺産「忍びの里 伊賀・甲賀」構成文化財一覧（伊賀市所在分）

（2025.3 現在）

	文化財の名称	指定等の状況	所在地
1	伊賀の中世城館群と天正伊賀の乱 激戦の城跡	県指定史跡 福地城跡 市史跡 柏野城跡 竹島城跡 壬生野城 未指定文化財 百地砦跡 雨乞山砦跡 丸山城跡 無量寿福寺 比自山城跡 千賀地城 掛田城跡	柘植町 柏野 愛田 川東 喰代 下友田 下神戸 長田 予野 下川原
2	上野城跡 （平楽寺跡）	国の史跡	上野丸之内
3	霊山山頂遺跡	県指定史跡	下柘植
4	手力神社と手力の花火	未指定文化財	東湯舟
5	徳永寺	未指定文化財	柘植町
6	修験道の寺 松本院	未指定文化財	上野西日南町
7	壬生野地域の中世城館群と春日神社	県指定有形文化財（建造物）春日神社 拝殿 県指定有形民俗文化財 雨乞願解大馬附相撲板番付 市指定有形文化財 古文書 春日神社古文書 伊賀国無足人帳 市指定無形民俗文化財 獅子神楽 未指定文化財 長屋座	川東 川西
8	敢国神社	未指定文化財	一之宮

9	伊賀流忍者博物館 (伊賀流忍者屋敷)	未指定文化財	上野丸之内
10	忍町	登録有形文化財 赤井家住宅	上野忍町
11	藤林長門守墓所	市史跡	東湯舟
12	愛宕神社	県指定有形文化財(建造物)	上野愛宕町
13	勝因寺	県指定有形文化財(工芸品) 梵鐘 未指定有形文化財(工芸品) 小天 狗清蔵肖像彫刻	山出
14	藤原千方伝説地(千方窟・ 逆柳・血首ヶ井戸・斗蓋ヶ淵)	市史跡	高尾

#### 4-7 日本の20世紀遺産20選

ユネスコ世界文化遺産に関する諮問機関であるイコモス(国際記念物遺跡会議)の国内組織である日本イコモス国内委員会は、20世紀国際学術委員会に対応する組織として20世紀国内学術委員会を設置し、平成25年(2013)より世界の動向に連動して「日本の20世紀遺産20選WG」を設置して議論を重ねてきた。

平成29年(2017)12月には、日本イコモス国内委員会により「日本の20世紀遺産20選」が選定され、旧上野市庁舎を含む近代建築群「伊賀上野城下町の文化的景観」が「伝統と20世紀遺産の対比・融合」を示すものの一つとして選ばれた。

20世紀遺産20選の選定の視点は、①20世紀に新たに登場したもの ②19世紀までにあり、20世紀に進化・展開したもの ③歴史上の事件を象徴するもの ④伝統と20世紀遺産の対比・融合 ⑤「日本」という地域性を表しているものであり、④の領域では、寺院境内と都市公園が融合している東京都の上野恩賜公園や、神社境内とモダニズム建築が並び立つ神奈川県立近代美術館(坂倉準三設計)が挙げられている。

表8 20世紀遺産20選 構成資産一覧

(2017.12選定)

	対象施設	指定等の状況	所在地
1	旧上野市庁舎	市指定有形文化財(建造物)	上野丸之内
2	西小学校体育館	未指定文化財	上野丸之内
3	伊賀文化産業城	市指定有形文化財(建造物)	上野丸之内
4	俳聖殿	重要文化財	上野丸之内
5	白鳳公園レストハウス	未指定文化財	上野丸之内
6	旧三重県第三中学校校舎	県指定有形文化財(建造物)	上野丸之内

7	旧崇広堂	国の史跡	上野丸之内
8	伊賀鉄道上野市駅	登録有形文化財（建造物）	上野丸之内
9	西町集議所	市指定有形文化財（建造物）	上野西町
10	上野文化センター	登録有形文化財（建造物）	上野中町
11	赤井家住宅	登録有形文化財（建造物）	上野忍町
12	入交家住宅	県指定有形文化財（建造物）・ 市史跡	上野相生町
13	一乃湯本館・門	登録有形文化財（建造物）	上野西日南町
14	蓑虫庵	県指定史跡及び名勝	上野西日南町
15	旅館薫楽荘本館・蔵・門及び 堀	登録有形文化財（建造物）	上野桑町